平成27年度

ウチナーンチュ子弟等留学生修了報告書

沖　縄　県

はじめに

ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業は、海外に在住する沖縄県出身移住者子弟や本県と縁が深いアジアから優秀な人物を県内の大学や県内企業、伝統芸能修得機関（以下「大学等」という。）で修学・研修させ、沖縄の歴史・文化・習慣の理解や、県内企業での実務経験、県民との交流を通して、将来的に本県と母国とのネットワークの架け橋になる人材を育成し、もって、本県と出身国との国際交流に寄与せしめることを目的としています。

昭和４４年度（１９６９年）の事業開始以来、本年度を含め６１４名の留学生を受け入れてきました。本事業を修了し帰国した留学生 OB・OG は、沖縄で習得した知識と経験を生かし、様々な分野において活躍しており、また、県人会活動にも積極的に参加するなど、母国と本県とのネットワーク拡充に貢献しております。

平成２７年度は、ブラジル２名、ペルー２名、アルゼンチン１名、ボリビア１名、アメリカ２名、カナダ１名、中国（福建省）１名、台湾２名の合計１２名を受入れ、そのうち１名が琉球大学、１名が沖縄国際大学、１名が名桜大学、２名が沖縄大学、５名が沖縄県立芸術大学にて修学し、１名が沖縄県三線製作事業協同組合、１名が松本料理学院において研修を行い、勉学や技術修得に励みました。

この報告書は、留学生が沖縄滞在中に感じた日本・沖縄に対する率直な意見や感想、大学での修業成果等をまとめたものです。学内スピーチ大会や課外活動、沖縄での親戚や友人等との交流など、様々な経験を経て成長していく姿を垣間見ることができると思います。本書が、当事業理解の一助となれば幸いです。

最後に、本事業実施に当たり、留学生を受け入れていただきました琉球大学、沖縄国際大学、名桜大学、沖縄大学、沖縄県立芸術大学、沖縄県三線製作事業協同組合、松本料理学院、並びに関係者の方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成２８年３月

沖縄県知事公室長
町田　優

平成２７年度 ウチナーンチュ子弟等留学生修了式　平成28年3月10日　於・サザンプラザ海邦

目　　次

○ウチナーンチュ子弟等留学生（１２名）

◎　沖縄の音を通じて学んだ事　　小野　英美 …… 1
（アメリカ）

◎　うむいに色差し　　ランジ　親川　マベル …… 7
（ペルー）

○　イチャリバチョーデー　　目取真　久野　フリア　恵子 …… 14
（アルゼンチン）

○　充実している留学生活　　陳　佑而 …… 20
（台湾）

○　私の人生を豊かにしてくれた沖縄　　具志堅　リジア　春恵 …… 24
（ブラジル）

◎　沖縄で本当の自分に出会った　　陳　雯儁 …… 31
（中国）

◎　おきなわと絆　　徐　佩鈴 …… 36
（台湾）

◎　地球兄弟　　安座間　上地　ジョン　喜智 …… 39
（ペルー）

○　自分のルーツを大切に　　宮城　ニコーリ　さおり …… 45
（ブラジル）

○　僕と沖縄　　新井　ブライアン　隼人 …… 50
（カナダ）

○　オキナワから沖縄へ　　金城　晃　アレックス …… 56
～文化の継承を求めて～　（ボリビア）

○　沖縄での思い出　　山中　メガーン　好美　カリスタ …… 66
（アメリカ）

ウチナーンチュ子弟等留学生事業概要

【目的】

この事業は、沖縄県出身移住者子弟及びアジア諸国等から優秀な人物を選抜し、県内の大学や県内企業、伝統芸能修得機関で就学・研修させ、沖縄の歴史・文化・習慣の理解や、県内企業での実務経験、県民との交流を深め、将来的に本県と出身国とのネットワークの架け橋になる人材を育成し、もって、本県との国際交流に寄与せしめることを目的とする。

【事業のあゆみ】

1903 年、本県から世界各国への海外移住が始まって以降、その移住者たちは各国で県人会などの独自のコミュニティーを作り活動している。そういった海外移住者の子弟を対象とし、沖縄県が昭和４４年に海外留学生受入事業を開始、ボリビアからの県系人子弟留学生を受入れて以来、「アジア諸国等留学生」等を含め、これまでに１５カ国１地域からのべ６１４人を受入れている。

【事業内容】

本事業では、留学生は「科目等履修生コース」または「伝統芸能修得コース」にて就学・研修を行う。

① 科目等履修生コース

A：日本語＋科目選択 （１年）	県内の各大学で科目等履修生として就学します。
B：日本語＋科目選択＋企業等研修 （１年）　　（６ヶ月）	科目履修修了後、実際に県内の企業に入って研修します。

② 伝統芸能修得コース

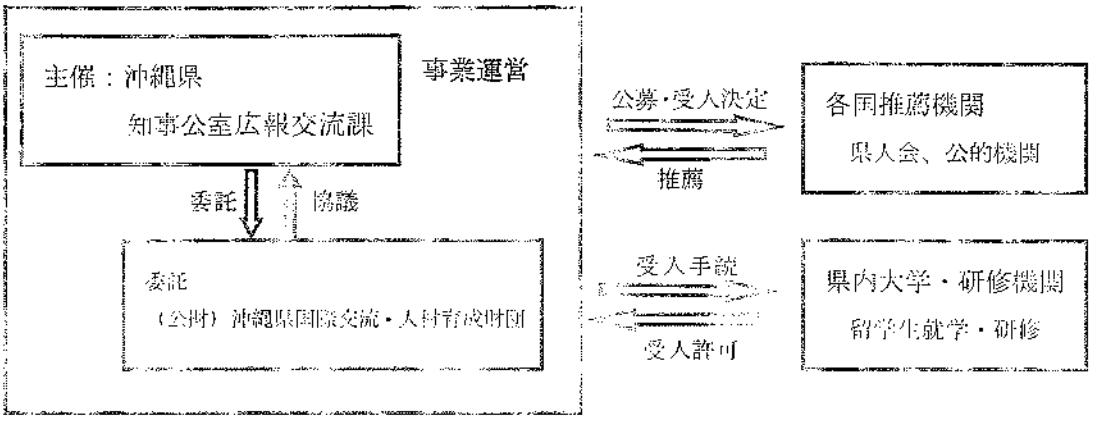
日本語学校＋伝統芸能・工芸研修 （３ヶ月）　　（９ヶ月）	県内の日本語学校で３ヶ月学んだ後、伝統芸能を教えている各学校・教室・施設で９ヶ月間技術研修を実施します。 ※日本語学校は研修生の語学力により判断します。
漆器、紅型、三線作成、花笠作成、琉球料理（沖縄料理）、空手等	

【運営体制】

沖縄県からの委託をうけて、（公財）沖縄県国際交流・人材育成財団（以下「財団」。）が沖縄県と連携しながら当事業を実施した。

留学生の選考・決定については、財団が各国の推薦機関へ留学生を公募し、推薦のあった候補者から県と協議のうえ決定した。

受入が決定した後、各々の大学や研修機関へ出願、受入許可を得て就学・研修を行う。



【本　年　度　ス　ケ　ジ　ュ　ー　ル】

4月初旬	県費留学生来沖	
4月中旬	就学/研修、沖縄での生活の準備	
5月14日	沖縄県副知事表敬及びオリエンテーション	沖縄県庁
5月29日	第1回定例会・懇親会	財団
6月15日～19日	移民パネル展	沖縄県庁
8月15日～16日	国頭民泊研修	国頭村内各施設
9月 7日	第2回定例会	財団
11月7日～8日	JICAフェスティバル・ブース出展・ワークショップ	沖縄国際センター
12月22日	第3回定例会	財団
2月20日～21日	ＪＩＣＡ横浜海外移住資料館・横浜中華街視察	横浜国際センター
2月26日	第4回定例会	財団
3月10日	平成２７年度ウチナーンチュ子弟等留学生修了式	サザンプラザ海邦
中旬	留学生帰国準備	
中旬～下旬	留学生帰国	

※この他、県内外で実施された交流・協力イベントに参加。

【プログラムの概要】

① オリエンテーション

日程：平成２７年５月１４日

場所：沖縄県庁

目的：沖縄での留学生活について知る。

内容：沖縄での留学生活がはじまった留学生は、この事業の目的、ウチナーンチュ子弟等留学生として留意することと義務の確認、大学や研修機関での生活について確認しあいました。

これから共に過ごす仲間たちと初めて出会い、不安と期待、そして希望を胸にウチナーンチュ子弟等留学生としての第一歩を踏み出しました。

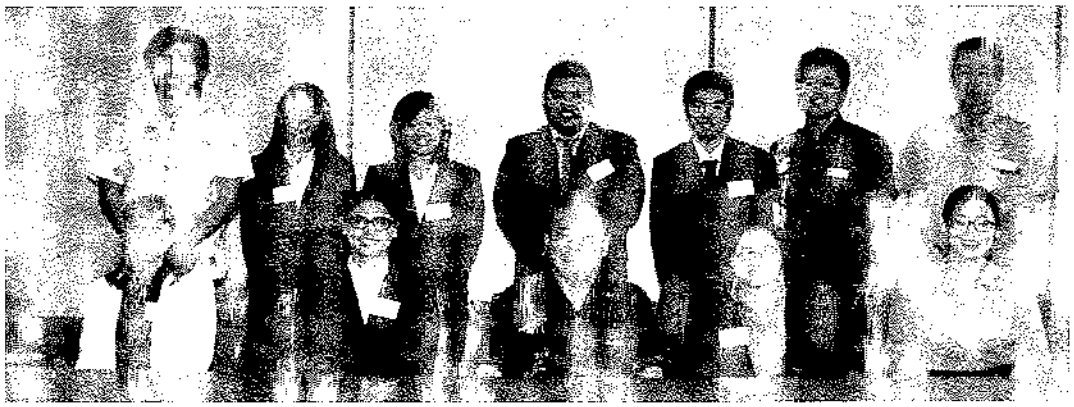
② 安慶田副知事表敬

日程：平成２７年５月１４日

場所：沖縄県庁　第１特別会議室

目的：安慶田副知事へのご挨拶。

内容：安慶田副知事を表敬し、自己紹介では、各々沖縄での留学への抱負を述べ、安慶田副知事から「沖縄と母国をつなぐ架け橋になってほしい」という激励の言葉をいただき、留学生も少し緊張していましたが、表敬はとても和やかに進みました。



③ 移民パネル展

日程：平成２７年６月１５日～１９日

場所：沖縄県庁　１階エントランス

目的：海外移住者について広く県民に伝える。

内容：６月１８日の「海外移住の日」に合わせて毎年行われる「移民パネル展」へ、留学生が各々の国のパネルを作り出展しました。

出身国毎に工夫を凝らして作ったパネルは、５日間にわたり県庁に展示していただき、多くの県民の皆様に海外移住者のこと、それぞれの出身国のことを紹介することができました。

④ 移民の日交流会（主催：パンアメリカン連合会）

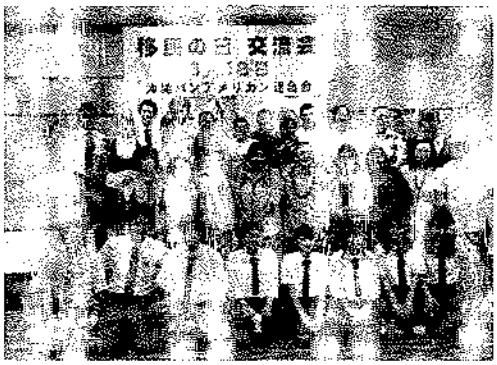
日程：平成２７年６月１８日

場所：那覇セントラルホテル

目的：移民の日交流会へ出席し、県民との交流を深める。

内容：６月１８日の「海外移住の日」は１０７年前に日本初の海外移民が行われた日です。

毎年その日にパンアメリカン連合会が主催する「移民の日交流会」にて、ウチナーンチュ子弟等留学生が招かれました。留学生は「島唄」と「安里屋ゆんた」を歌、三線、エイサー、踊りとともに披露し、会場のみなさんも一緒に歌ってくださり大盛り上がりでした。たくさんの方から大絶賛をいただき、とてもすばらしい一日となりました。



⑤ 国頭民泊研修

日程：平成２７年８月１５日～１６日

場所：国頭村内各施設

目的：民泊を通して、沖縄の文化や自然について学び、県民との交流を深める。

内容：今回の研修では、国指定無形民俗文化財に指定されている「安田のシヌグ祭り」への参加や、「ヤンバルクイナ生態展示学習施設」の見学など沖縄の文化・歴史や自然について考える研修となりました。

特に、一般の民家に一晩泊まる「民泊」では、三線教室やサーターアンダギー作りなどの沖縄の文化に触れることはもちろん、国頭や沖縄のことについて多くの事を学びました。そして、受入れてくださった方々は留学生を本当の子や孫のように温かく迎えてくださり、「いちゃりばちょーでー」の精神をはじめ、地域の沖縄の暮らしや文化を肌で感じることができ、留学生にとってとても有意義な時間となりました。

⑥ おきなわ国際協力・交流フェスティバル（ＪＩＣＡフェスティバル）

日程：平成２７年１１月７日　ブース出展

平成２７年１１月８日　ブース出展・ワークショップ

場所：沖縄国際センター

目的：ＪＩＣＡフェスティバルに参加し、県民との交流を深め、自国の紹介をすることにより、国際理解・協力を呼びかける。

内容：ＪＩＣＡフェスティバルは、沖縄県内外の国際交流・協力に関わりのある団体が行っている沖縄からの国際協力・交流に対する県民の理解及び支持の拡大と参加の促進を目的に毎年沖縄国際センターで開催されています。

本年度も留学生はブースを出展し、ご来場いただいたみなさんにパネルや、クイズを使って自国の文化を紹介し、「コトバの通じない世界を体験しよう」ワークショップを行いました。ワーク

ショップでは、予想以上の人数の来場者が参加、「コトバが通じないなら、どのようにコミュニケーションをとるか？」を一緒に考えることができました。

⑦ <u>ＪＩＣＡ横浜・海外移住資料館、横浜中華街視察</u>

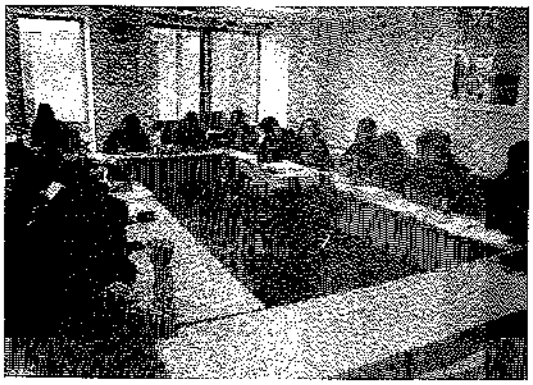
日程：平成２８年２月２０日～２１日

場所：ＪＩＣＡ横浜・海外移住資料館、横浜中華街

目的：沖縄県系人以外の移住者子弟との意見交換をし、日本の海外移住の歴史を知る。
横浜中華街を視察し、移住者による街作り、文化継承について考える。

内容：１日目、ＪＩＣＡ横浜の小幡所長にご挨拶したのち、海外移住者による街作り・文化継承が盛んである横浜中華街の視察と聞き取り調査を行い、その工夫や考え方を知り、留学生は帰国後の出身国と母国との架け橋となるためのヒントを得ることができたようです。２日目のＪＩＣＡ横浜で研修を行っている日系研修生のみなさんとの意見交会では、「我々はハーフではなく、“ダブル”だ」という意見をいただき、留学生の励みとなりました。ＪＩＣＡ横浜内にある海外移住資料館では、海外移住者の歴史を学び、移住一世のみなさんの苦労や思い、新生活への期待を感じていました。

この２日間の経験で、自身のアイデンティティを確認し、帰国後や留学生プログラム修了後の活動の指針を考えるきっかけになったようでした。



⑧ <u>平成２７年度ウチナーンチュ子弟等留学生修了式</u>

日程：平成２８年３月１０日

平成２７年度ウチナーンチュ子弟等留学生 修了報告会

平成２７年度ウチナーンチュ子弟等留学生 修了式

懇親会

場所：サザンプラザ海邦

目的：留学生プログラムに参加しての報告

内容：本年度の留学生プログラムを全て終了し、沖縄での生活、学んだことについてお世話になった県、受入機関、国際交流団体、身元保証人の皆様にご報告しました。学んだ事はとても多く、語りきれない経験、感謝もたくさんありましたが、留学生はみな沖縄での経験を出身国でも活かすことを表明しました。会場には、留学生が各受入機関で作成した成果物や、思い出の写真を展示し、参列者の皆様がご覧になりました。

修了式では、厳かな雰囲気の中、沖縄県知事公室秘書広報交流統括監新垣秀彦から、修了証書、記念品を受け取りました。

懇親会では、留学生による琉球舞踊、三線による余興も行われ、参列していただいた皆様にも楽しんでいただきました。

一年間お世話になった皆様への感謝の気持ちを持ち、留学生は「沖縄と出身国との架け橋」としての第一歩を踏み出しました。

平成２７年度ウチナーンチュ子弟等留学生名簿

小野 英美

出身国/地域：アメリカ

沖縄県立芸術大学

音楽部 科目等履修生

ランジ 親川 マベル

出身国/地域：ペルー

沖縄県立芸術大学

美術工芸学部　科目等履修生

目取真 久野 フリア 恵子

出身国/地域：アルゼンチン

沖縄県立芸術大学

美術工芸学部　科目等履修生

陳 佑而

出身国/地域：台湾

沖縄県立芸術大学

芸術文化研究科 研究生

具志堅 リジア 春恵

出身国/地域：ブラジル

琉球大学

科目等履修生

陳 雯倩

出身国/地域：中国

沖縄大学

国際コミュニケーション学科

徐 佩鈴

出身国/地域：台湾

沖縄大学

国際コミュニケーション学科

安座間 ウエチ ジョン 喜智

出身国/地域：ペルー

沖縄国際大学

科目等履修生

宮城 ニコーリ さおり

出身国/地域：ブラジル

名桜大学

科目等履修生

新井 ブライアン 隼人

出身国/地域：カナダ

伝統芸能修得コース

沖縄県三線製作事業協同組合

金城 晃 アレックス

出身国/地域：ボリビア

伝統芸能修得コース

松本料理学院

山中 メガーン 好美 カリスタ

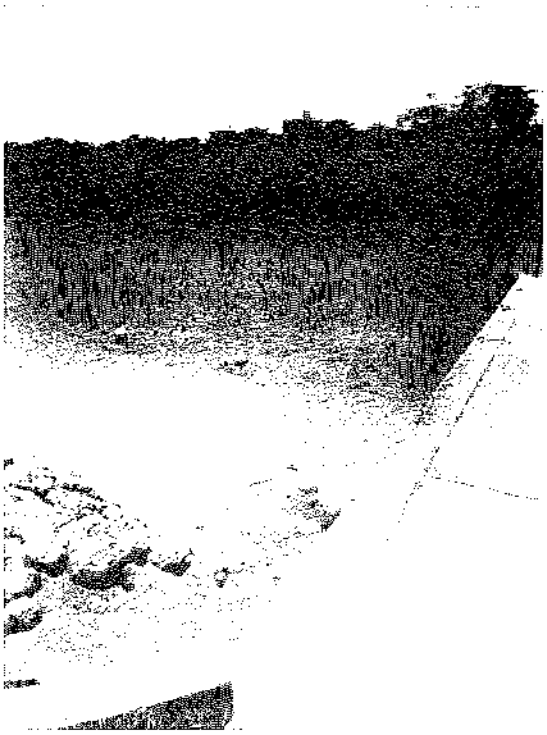
出身国/地域：アメリカ

伝統芸能修得コース

沖縄県立芸術大学

沖縄の音を通して学んだ事

小野英美（アメリカ）
沖縄県立芸術大学



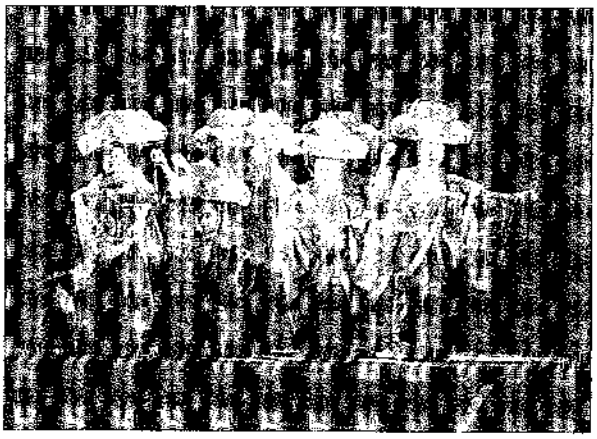
小さい頃は沖縄に対してぼんやりとしたイメージしかなくて、綺麗な海や独特な文化などよく聞く謳い文句はおろか、ただ単におばあちゃんや親戚に会いに行く場所としか思っていませんでした。大人になるにつれてようやく自分のウチナーンチュとしてのアイデンティティと真剣に向き合うようになり、両親が昔から勧めていた沖縄留学を決心しました。

実際留学してみると昨日沖縄に来たばかりでまだ何も始まってもいないという感覚に陥ったと思ったら、毎日が忙しく充実していてとても濃い 1 年になりいつの間にか終わりを迎えました。沖縄でやってきた事、感じ取ったことをすべて言い表せられないぐらいに多くて、まるで夢のような 1 年間の体験でした。

沖縄県立芸術大学では昔からやっていた琉球舞踊を専攻しました。琉球芸能専攻は人数も少ないからとてもアットホームな雰囲気でいろいろな流派、経歴を持っている生徒、先生方に支えられながらの学校生活でした。留学生は代々1 年次と一緒に授業に出ますが、年の差を感じる事はあっても私をとても温かく迎え入れてくれて 1 年たった今では全員とてもフランクに接せる友達です。舞踊専攻の場合は舞踊実技の他に組踊り実技、歌三線が必須科目です。そのほかに副科で笛、太鼓、胡弓の器楽、そして琉歌を勉強する詞章研究やウチナーグチを分析していく音声学などの舞踊や琉球芸能の理解を深める授業を選択しました。器楽に関し

では一切経験がなく未知の体験でしたが、沖縄の音楽の理解を深めるいい機会となりました。以前は何気なく聞いていた曲とかでも、三線の旋律や声だけでなく太鼓のリズム、胡弓と三線との息の合った音色、笛のアクセントなども耳を傾けるようになりました。扮装法という授業では以前から習いたかった舞台化粧や髪結い、着物の着付けなども集中的に学べてとても勉強になりました。

県立芸大での授業とは他に、琉舞道場にも通いはじめ、昔からの夢だった舞踊の新人賞コンクールへ向けてのお稽古にも励みました。アメリカにいた頃に通っていた琉舞道場と同じ流派で、先生の指導がとても情熱的でした。道場も住んでいる首里ではなく北中城と通うのが大変だったが毎週行って先生や先輩に会うのが楽しみでした。



もちろん学校や道場以外でも、他の留学生達との日々もとても楽しかったです。個人的には舞台や日々の稽古があり思うようにみんなと遊べなかったですが、そ

れでも県庁表敬や移民の日を祝うパーティー、JICA フェスティバルから定期的にある留学財団での定例会といろいろなイベントでみんなと楽しめたのはとてもいい思い出です。イベントだけでなくても何気ない日々の会話や遊びに行く約束、お互い忙しくて全員集まれるのは難しかったけどもその中でも築けた友情はとてもいいものでした。今後お互い自分の国に帰っても、その国に遊びに行く理由、会いに行ける友達がいるという気持ちです。

この一年間ではいろいろな事に挑戦しようと決めて、積極的に舞台やイベントに参加しました。まずは 6 月には 10 月の芸大での定期公演への出演、演目を決めるオーディションに出ました。これは個人の流派の手で芸大の先生方の前で踊り、その結果によって少人数で踊ったり、大きい群舞などに出るもので、年功序列ではなくあくまで個人のスキルでの出演権でした。道場の先生にお願いして 2 週間みっちり稽古して頑張りました。また、8 月には芸大での授業の一環として始めた笛の新人賞コンクールに挑みました。完全な未経験から 4 ヶ月と練習期間はとても短かったですが無事に合格する事ができました。その後、12 月には新聞社主催の芸能祭にも初めて地謡として笛を吹きました。結果は個人的には残念で思うように音を出せなかったけど貴重な体験でした。

11 月には芸大の学園祭があり、そこで沖縄に来て初めて観客の前で一人踊りを披露する機会がありました。芸大祭の催し物は昔から琉球芸能専攻の 2 年次が企画、主催するもので、夏ごろに初めて話を頂きました。自分で曲目を決め、学校

の先生の指導はなくすべて衣装からすべて自分で用意しとても大変でしたが自分の好きな踊りを自由にでき学校で自分の流派の踊りを見せれる事は今でもとてもいい思い出です。

今年はいろいろな舞台に立たせて頂いたのもとても印象深かったです。今までアメリカでは年に 2、3 回しかないものがほぼ毎月出演に跳ね上がりました。芸大での舞台ではオーディションで出演権を得た定期演奏会、教職者研修の余興、1 月の学内演奏会など様々でしたがそのほかにも大学行事での離島公演、芸大創立 30 年を記念する式典など学校関連のもので外でも舞台に立つ機会もありました。

特に離島に行けたのはとても印象深くて、生まれて初めて沖縄の離島に行けるチャンスを学校がくれたのはとてもありがたかったです。芸大では年に 1 回、沖縄の離島へ出向き「移動大学」というイベントを開きます。そこで何日か掛けて美術、音楽、琉球芸能の出張授業を開きますが、その一環として本島の琉球芸能を披露するメンバーの一人として 2 泊 3 日で竹富島、小浜島に行く事になりました。まず感じたのが海と島の青さで特に島は本島と比べられないほど緑が色濃く印象出来でした。人もとても温かく、いろいろ舞台の手伝いも丁寧で小学生も私たちを見かけたら挨拶してくれたり初めての体験でした。実際の琉球芸能公演も公民館から人が溢れるほどお客さんが来て頂いてとても感慨深かったです。

また同じ公演で八重山の芸能も島民が披露してくれて、私がやっている本島の踊り、歌三線の違いも見れて自分の芸能と比較出来て自分の踊りに活かせられると感じました。移動大学は結構ハードスケジュールで観光もあまり出来なかったですが、とてもいい経験で行ってよかったと思っています。

学校外でもいろいろな舞台に参加できたのもと初めての経験で新鮮でした。同じ 1 年生たちに余興に何度か誘われたりと同期でできるのがとても楽しかったですが、今年の中で一番思い出深い舞台は「綾庭の宴」です。芸大のクラスメートに誘われて入ったもので約 3 か月かけて稽古を進めました。この舞台はいつもやり慣れている古典舞踊などではなく舞踊、エイサーなど様々な沖縄の文化芸能を芝居やストーリーと混ぜ、沖縄の歴史と文化や思いをウチナーンチュたち本人に伝えていきたいという趣旨のものです。舞踊部は 12 人と結構な大所帯で、場面によっては台詞や演技もあったりとなれない事ばかりでした。出演演目も多いため稽古量も多く、メンバーも仕事や学業でなかなか集まれなかったりととても大変でしたし、花形であるだけに舞台監督の目も厳しかったです。ですが本番に近づくにつれの舞台の緊張感、終わった後の達成感は比べられないほどでした。獅子舞や舞台制作、空手や演劇と様々な分野で活躍している人達とも出会えて人との縁を作れた綾庭の舞台に感謝しています。舞踊部のメンバーとも初対面だったのに

とても仲良くなれてつくづく舞台に関われてよかったなと思います。

この留学期間を振り返ってみて、人生の分岐点となるような大事な年でした。4月に沖縄に来て以来、生活が芸能一色になって自分の未熟さに辛く思うことはあっても好きな事ができるとてもとても幸せな 1 年でした。書ききれないほどいろんな新しい出会いや再会がありましたが、一人ひとりと会えたことによって意識や考え方に影響し、今の自分のあり方があると実感しました。

芸大で学んだ知識や技術ももちろんですが、沖縄の芸能、沖縄の音楽を通して学んだ事はそれ以上です。実演家としての在り方、芸に対する考え、人との繋がり、自分のルーツを見つめ直す大切な 1 年でした。芸大以外での日々の生活もとても有意義に過ごせて、心の底から沖縄に来れた事、他の 11 人の留学生と出会えたこと、こんな貴重な体験を出来た事を嬉しく、感謝の気持ちしかありません。

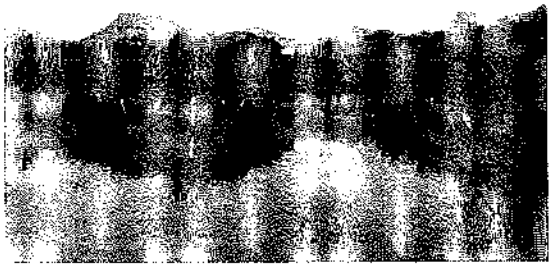
ありがたい事に新年度から沖縄での仕事も決まり、留学生ではなくなりますが舞踊、古典三線の新人賞コンクールに向けて稽古を続け、引き続き琉球芸能を沖縄でやるチャンスをつかめました。この 1 年間お世話になった親戚、友達、先生方、すべての人にまだ同じ沖縄で生活できる事なりました。今年の留学で学んだ事を使って今後沖縄、世界へ向けて恩返ししたいと思っています。

うむいに色差し

ランジ親川マベル（ペルー）
沖縄県立芸術大学

私の名前はマベルです。みょうじが二つあって、父方のみょうじ(ランジ)と、母方のみょうじ(親川) を普段から使っています。親川というお母さんやおじいちゃんのみょうじは沖縄がルーツでありながらも、家庭の中で沖縄の文化に触れたことはこの２６年間の間、ほぼありませんでした。私の心の背景には、ペルーの街並みと自分自身が１０才の時に関西から持ち帰った記憶や感情らが強く存在していました。そんなこともあって、私の中で、私がふるさとと言えた場所は間違いなく７年間住んで育った土地、大阪でした。

そんな私が去年の夏、３６時間という長い時間をかけて沖縄にやってきました。ペルーではなく、そして日本でもなく、沖縄の文化とのつながりを見つけ、深めることを望んで、県の留学のプログラムに応募しました。一年間の間で、沖縄からたくさんの知恵や経験、感情や思い出を得ること、そして家族や自分のパーソナルヒストリーをもっと大切にし、自分のウチナンチューさを発見していける機会が生まれるのではないかととても期待しながらこの冒険が始まりました。



沖縄という新しい環境での生活の中には、やっぱり初体験がたくさんありました。その中でもとても大きな初体験は一人暮らしでした。一人暮らしをするこ

とで、責任や家事のお仕事だけではなく、色々な出来事について考える時間が増えたり、自分と向き合う機会が多くなったりしたので、この一年にとって適切なスペースをつくれたと思いました。個人的に、何かに対して大きな決意をとるというより、流れに身を任せて行動するタイプの性格だったので、一人暮らしをすることで、自分がちゃんと思っていること、優先すること、望んでいることを大事にして行動することが増えました。この家庭できたえた能力を、これから色んなものに生かせることができたら、とても心強いです。

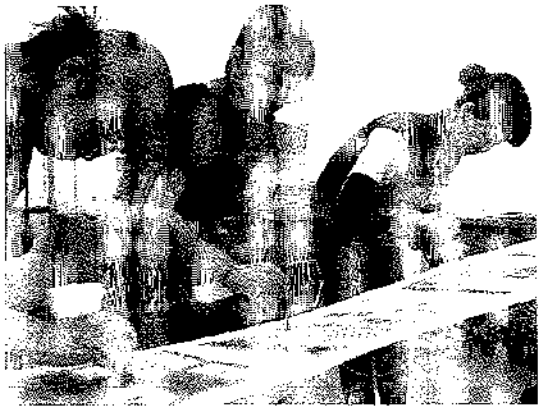
又、いまだにそうですが、沖縄ならではの暮らし方や工夫を自ら知ることで、少し現地の人になることができたと思いました。台風の準備をしたり、一日に何回もシャワーを浴びたり、豚肉を普段よりたくさん食べたり、しゃべる時に方言を使ったり、傘が風で壊れて、合計で５つぐらい買ったり、服を着たままビーチに入ったり、知らないおじいおばあに話しかけられたり、と沖縄の人だからこそやる、言う、体験することを体験できたので、前よりウチナンチューになっているのかな。。。と思ったりもします。ビギンの唄に出てくる歌詞の通り、暮らしの中で、教科書でも学校でも学べない文化の大切な一部を学べることが出来たと思います。

この留学の期間で勉強する課題として工芸を選びました。私は、ペルーでグラフィックデザインを勉強しましたが、社会人として働き始めた時、手で物を作る機会がほぼなくなったのでもっと感情や人間性を表せるものを作りたい気持ちでいっぱいになりました。

工芸は４分野に別れていて、前期ではその４つ：染、漆、陶芸、織を中心とした作品を作ることが出来ました。どの工芸も細かく、時間のかかるものでしたが、各課題を１８日間の間で頑張って完成しました。

後期では２年生全体が分野ごとに別れて活動をし始めました。もっと仲良くしたかった子たちと別々のクラスになってしまったので少し残念な気持ちもありましたが、一人ひとりの染のメンバーと仲良くなれる機会でもあったので、うれしさみしい気持ちで後期を迎えました。

染めの授業では、沖縄の一番伝統的な紅型の基礎や技法の模写を作る作業がたくさんでてきました。染料の作り方や、ひとつひとつの道具の使い方やこつを、作品を作りながら学んでいきました。他に、色の実験など、見本を作る機会もたくさんありました。染という具体的な工芸をすることで、改めて工芸のグローバルな意味を理解することができたと思います。やっぱり色んな手仕事の価値をより理解するためには、どれだけの苦労や知恵、時間が必要だったのか、自ら味わうということは大切なことだと思わされました。



古典紅型の場合も、数え切れないくらいのたくさんの工夫が道具や技法にあることを知りました。

具体的な例として、紅型の付き彫りという技法をこなすためにはまずきれいにシーグーをつつけるためのある程度柔らかくてある程度かたいベースが必要です。そのベースが豆腐を何度も乾燥させたうえで小さくなったルクジューとい

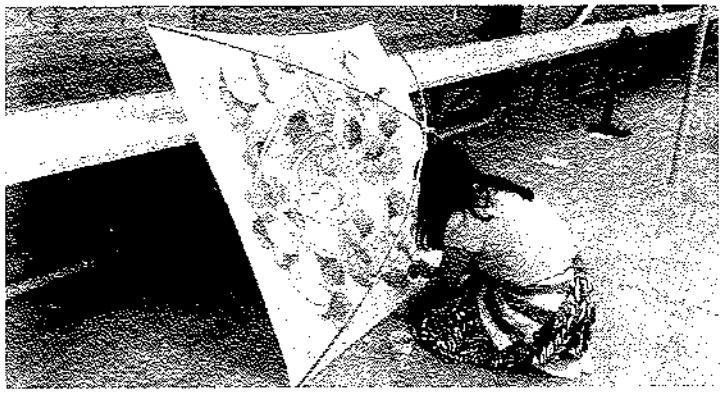
うこの技法に最も適切な道具です。紅型の長い歴史からして考えてみると、何年の間をかけて、何人の手仕事をたどって、そしてどれだけの実験を重ねてこのルクジューというものが出来上がったのかはわかりませんが、簡単なプロセスではなかったということは明らかです。今回私は、職人さんという人たちに対しての感心がとても深まりました。

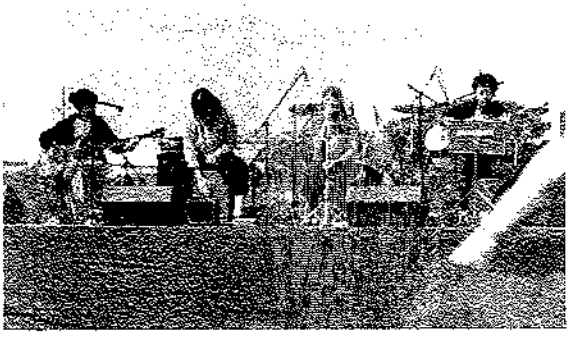
別の例として、沖縄独特の藍染めに使う藍という顔料は、りっぱな工房でも完璧につくるのが難しく、ただ単に材料をかき混ぜるという作業では済まないものです。温度や濃度を計ったり、足し算や引き算をしながら完成させてくものです。

古典紅型の模写を作った時などは、このような道具や材料をできるだけゼロから作って使用したので、達成感も普段の時より大きく感じることが出来ました。染の基礎としての全ての作業：型堀、筒引き、紗張り、糊置き、色差し、二度刷り、隈取り、蒸し、水元、糊伏せ、地染め、を模写で行った上で昔の人の立場から作業をし、見ることが出来ました。

ある現地だけにある、現地独特の材料を使って、そこに住む人々の日常生活に目で楽しめて、役立つものを作るということは、作り手からしてとても嬉しい

ことであり、現地に対しての感謝と尊敬の気持ちを強くさせてくれるものだと改めて思いました。又、現地の自然との距離や関係も深くなるんだと思います。





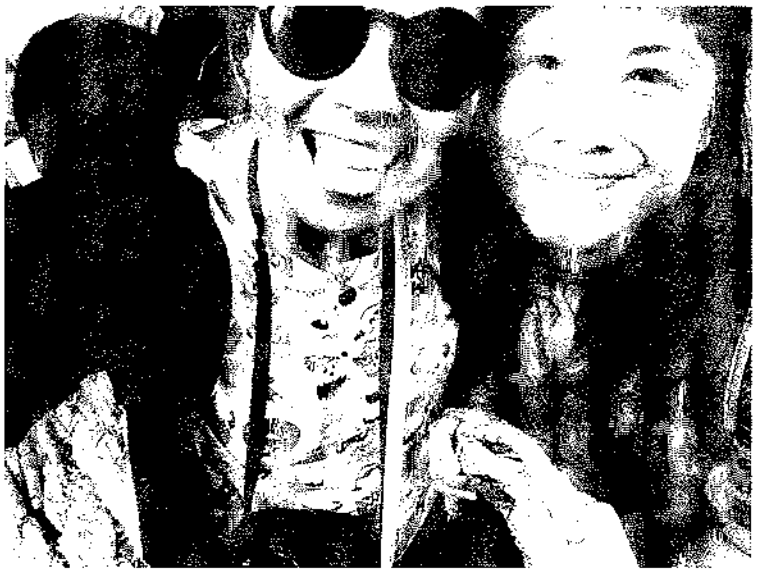
大学では、工芸の授業以外に、芸大祭のためにバンドを組んで演奏したり、ライブペイントをしたり、スケッチ旅行で久高島へ行ったり、お正月には染のメンバーで着物を着て先生方と一緒に初もうでに行ったり、バレーボール大会や忘年会に参加しました。前期の最後の週には、南米でよくやるプレゼント交換をみんなとして、ほほえましい気持ちでいっぱいになりました。

大学以外の面で、県費留学生として、一年間の中で色んなイベントや行事に参加することができました。この様々な行事を通して、色んな疑問を解決したり、知ってもいなかったことに興味を持ち始めたり、自分の国のこと、そして沖縄や移民のことについてもっと調べて、深く考える機会が生れたりしました。又、色々な人たちと交流をしたり、旅行で自然を満喫したりもしました。ひとりひとりの県費留学生の成長をお互いに観察しながら、そして同じウチナンチューというルーツを持つ仲間としての共通点や違いを見つけることもできました。

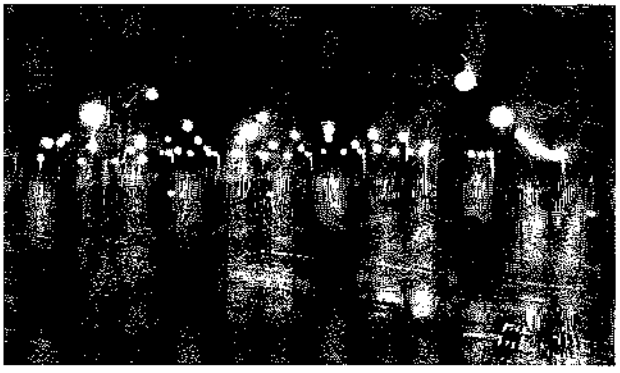
移民の日に向けて、自分の国のパネルを作ったり、スピーチコンテストに出たり、ペアーレというグループのために質問のパズルや自分の国の料理も作りました。

ジャイカのフェスティバルや絵本の読み聞かせでは、コミュニケーションにあたる言語や、トーンやジェスチャーの大切さについて考えることが出来ました。

私は沖縄に来て、すぐ沖縄の方言を学ぼうとしたのも、やっぱり現地にはやくなじんでいくためのひとつの方法だと感じたからだと思います。沖縄に住んでいるウチナーグチへの好奇心はペルーには（ケチュア語に対して）なかなかないもので、いまだに感心してしまいます。日本語じたいも変化していってるので同じだと思いますが、方言を大切にすることは、現地のうむいを理解させてくれる大切な道具でもあるんだと思います。

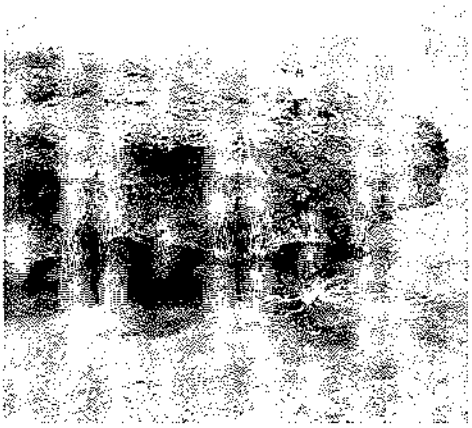


この留学の期間を通して、ウチナンチューというひとつの言葉が自分の中で色んな背景を持ち始めたような気がします。そしてこの場所に住んでいる色んな人たちのうむいを少しでも共感できたと私は思っています。今年は、素敵な出会いがありすぎたせいか、一番笑って一番泣いた年でした。沖縄に戻ってくる理由の数が数え切れないくらい増えました。今後、このありがたみと誇りの感情を大事にして、ペルーで沖縄の良さを共感してもらうために何かできたらなあ、と思っています。



イチャリバチョーデー

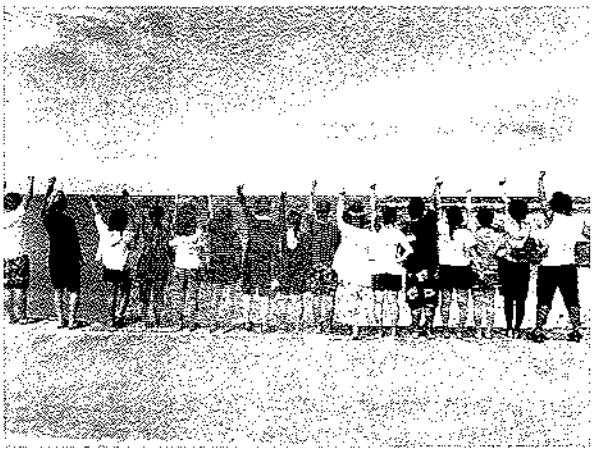
目取真久野フリア恵子（アルゼンチン）
沖縄県立芸術大学



最高のけいけん、たくさんの新しい友達、そして、大好きなこの沖縄と、とうとうお別れの時間がやってきました。

数えきれないくらい、たくさんの学びがありました。一年前は、どこへ向かって行くかも、沖縄のこともあまり分からず、私の言葉を話さない、私の知らない場所へ、一人で来ました。ですが、怖くなかったです。なぜなら、沖縄にくることが私の夢のひとつだったからです。夢がかなえられて、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、まだまだ成長や学びを得るために、また新しい目標立てていきます。

びんがたは、沖縄の伝統的な染の手法です。とても繊細で、労働と時間がかかります。芸術性が低い服の大量生産・消費の時代のなか、このびんがたの技が守られて、今でも受け継がれていることに感激しました。文化を守る沖縄の強い気持ちはすごいと思います。ウチナーンチュはみんな、過去への窓を開けて沖縄の文化を引き継いでいます。紅型を学ぶことができたのは、光栄でもあり、職人の技と想いが込められた物づくりの価値について、深く考えさせられました。

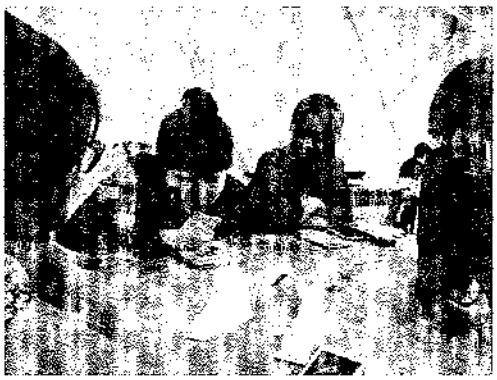


この一年間は、私が想像した以上の学びがたくさんありました。ぴんがたはもちろん、日本語もそうです。日本語の勉強はいつも難しかったです。アルゼンチンではここと違い、毎日のように日本語にふれないし、聞きなれないです。まだまだ覚えることはたくさんありますが、日本語で日常会話ができて、間違いはたくさんあるけれど、日本語で書くこともできて、とても嬉しく思います。沖縄で日本語が上達できたことが、アルゼンチンでも日本語の勉強を続けようというモチベーションになっています。

さんしんとエイサーも学び、アルゼンチンへ帰っても続けていきたいと思います。

また、沖縄へ来たことは、先祖とのつながりの旅でもありました。世界の色ん

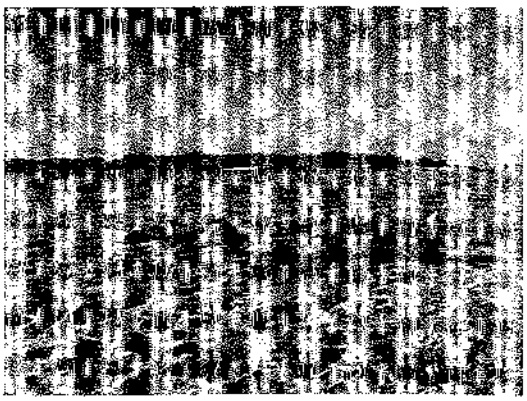
な国に親戚がいることが分かりました。沖縄で初めて、私のおじいちゃんの写真もみました。私のルーツをみつけることができ、絶対に離さず大切にしていきたいと思います。



日本といろいろな国についてまなんだけど自分じしんの国についてもまなんだ。みんなに、アルゼンチンについておしえたかったから自分の国についてけんきゅうしたし、自分の言語もみんなにちょっと教えた。クラスメイトときゅうけいの時間でスペイン語のレッスンをしました。

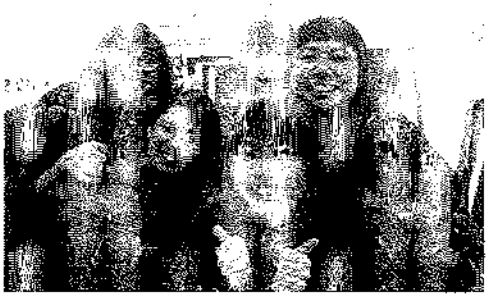
この旅で一番厳しかったことは、家族と遠く離れていることでした。寂しい時やつらい時にそばにいて、ハグをすることもできないことは、大きなフラストレーションでした。身内の不幸でつらい時も、アルゼンチンにいる家族や友達は遠く離れていても私を支えてくれて、見守ってくれて、心から感謝しています。そのおかげで、心を落ち着かせることが出来、沖縄での滞在を最高に充実することが出来ました。

沖縄で得たもっとも大切なことは、ここで出会った美しい方々です。新しい友達と、世界中にいる兄弟のような、新しい家族。これからは、それぞれ別々の道で、別々の国でみんなバラバラですが、ずっと私の心の中にいて、ずっとつながっています。



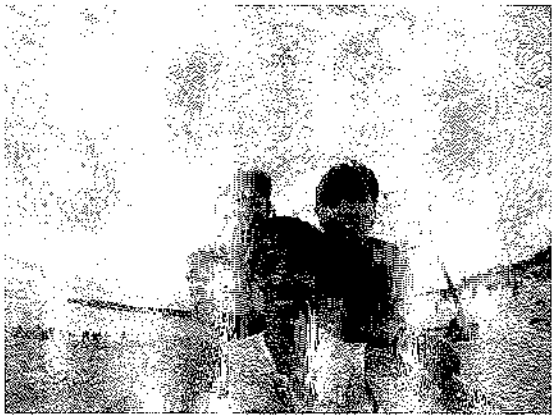
沖縄に来るとき、アルゼンチンの友達と離れてしまうと思っていましたが、その関係もさらに強くなりました。長らく話さなかった友達とも久しぶりに連絡をとることが出来ました。自分の自身を再確認し、本当の自分とつながることも出来ました。新しい人たちに出会い、その人たちからたくさん学びました。

最初は、一年間はとても長いと思っていました。ですが今は、とてもとても短いと感じています。もっと沖縄にいたいです。本当の自分が出せる場所と人たちがいて、こんなにも幸せで、自分に自信があるのは初めてです。沖縄に来たことで、世界中に友達が出来、文化を学び、先祖とつながり、視野が広がりました。この気持ちをみんなにも伝えたいです。



この体験から芽生えた気持ちは、かけがえのないものです。大切な友達が教えてくれた歌のように、「この季節を持って帰りたい。無理なおみやげです」。沖縄に何を残して、何を持って帰れば良いのだろう？６カ月前からこれを考えて、涙がでます。今生きているこの素敵な時間は、二度と繰り返すことのできないものだと分かるから。。。

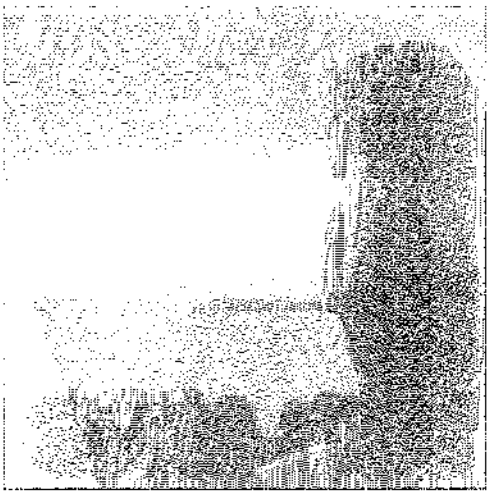
でも人生はいつもそうです。すべての良い一時、集まり、ハグは、同じ状況やタイミングで繰り返すことはできません。ですが、心の奥深くに残ります。幸せな一時は永遠に心の中に残しておきたいものです。これが文化の多様性の一番素敵なところです。心も視野も広がり、すべての瞬間を大切にします。



これまで出会った全ての人々に心から感謝しています。人生は幸せになるためにあるのだと再確認できました。知らない場所にいても、周りから優しくてあたたかい人に囲まれたら、家のように居心地が良くて、安心できます。この気持ちは、全員が求めているものではないでしょうか？

このことを一言で表現できる言葉が、沖縄の「イチャリバチョーデー」です。どこでも誰でも、みんな出会えば兄弟、楽しい時間めんそーれー。ありがとう、沖縄。本当に美しい島です。私にとって、この経験は大きな挑戦であり、永遠に心の中に残ります。

だから、近いうち別れなければならない大好きな沖縄と、大切な新しい友達に伝える言葉は「さよなら」ではなく、「また会いましょう！」です。



沖縄、みんな、いっぺー　にふぇー　でーびる。

充実している留学生活

陳佑而(台湾)
沖縄県立芸術大学大学院

平成27年9月26日～10月4日

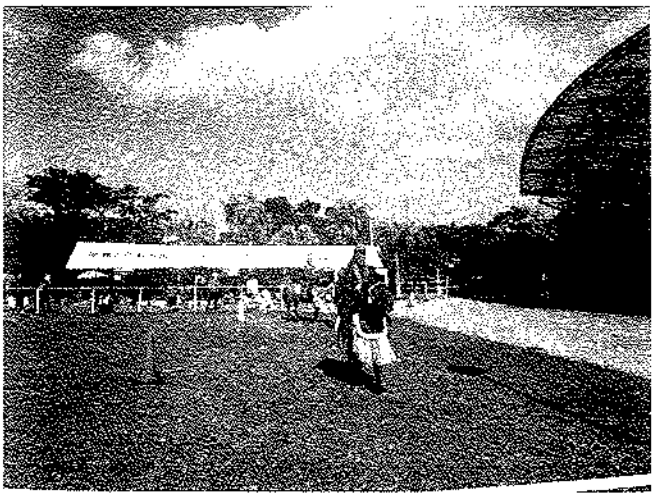
沖縄コンテンポラリーアートセンターで個展「Pieces of You」を開催、動物をテーマとして、沖縄で制作した乾漆作品を展示された。展示期間はワークショップ「Let us become one」を行い、作品についてのトーク、そして沖縄こどもの国からやってきた動物達と実際にふれあい、ヒトと動物が一体になる影絵撮影会を開催した。「アジアン・コミュニケーション2015プロジェクト」計画の一部として、今回の個展を通じて、沖縄地域との交流ができた。

平成27年10月24日

財団で外国語の絵本読み聞かせイベントに参加させていただき、台湾の原住民たちの文化を沖縄の方々に紹介、台湾での名勝「日月潭」についてゾウ族の神話も読み聞かせた。台湾は多民族社会として、原住民文化は台湾の文化の中で重要な部分であると考えているので、絵本の読み聞かせをきっかけとして、沖縄の人々に紹介することができたのはありがたい。

平成27年10月25日/平成28年1月31日

沖縄こどもの国で開催された沖縄伝統競馬「ンマハラシー」を見学することができた。学外の時間は動物園でボランティアしながら、沖縄特有な動物、例えば与那国馬、ヤンバルクイナ、ケナガネズミや豊かな自然生態について色々と教えていただいた。

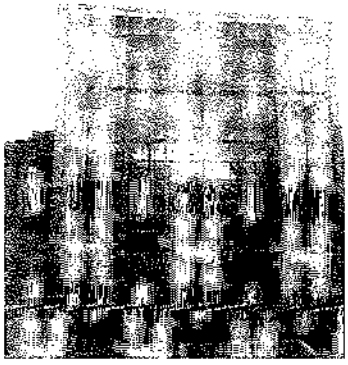


平成27年11月7日～8日

沖縄JICA国際フェスティヴァルに参加、各国から沖縄にやって来た方々に出会って、各地域の独特な文化、服装、音楽、料理などを味わうことができた。そして来て頂いた方々に台湾の文化や、自分の地元の料理や名勝を紹介し、互いに交流ができた。

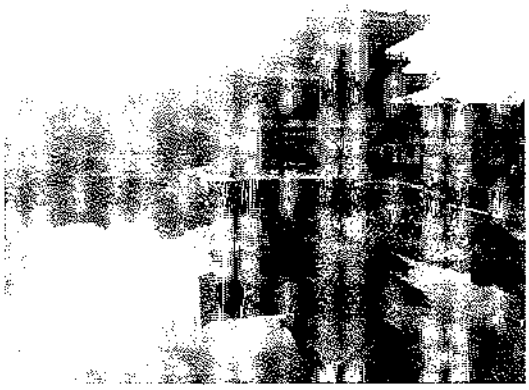
平成 27 年 12 月 1 日～8 日

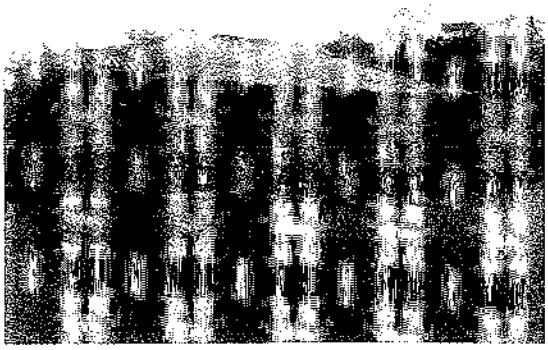
沖縄県立芸大の崎山キャンパスで芸術文化学後期博士課程の研究発表展「不確かな実在」を開催、動物をテーマとして、沖縄に来てから学んだ乾漆技法で制作した作品を展示した。同月 6 日に博士課程の論文研究発表を行い、博士課程に入って以来“近代動物園の発展と人間と動物の関係について”をテーマとして二年間の研究成果を発表した。



平成 27 年 12 月 10 日～19 日

学校の教授と学部生と一緒に京都と奈良へ日本の上代美術を見学しに行って、主に飛鳥、奈良、平安、鎌倉時代のお寺や仏像を回って、日本の伝統的な美術を自分の目で見ることができ、貴重な体験ができた。自分がやっている乾漆技法は日本に長い制作歴史がある伝統技法であるので、今回の古美術研究を通して、漆の日本の美術の中での重要さがわかるようになって、漆作品の美しさも自分の目で鑑賞できた。





平成 28 年 1 月 8 日

財団が主催した外国人による日本語弁論大会へボランティアをしに行った。同期の県費留学生たちと沖縄の他の大学にいる、各国から来た留学生の講演を見学す

ることができ、同じ外国人として、日本文化に対する各々の視点から感じたことを聞いた。そして入場された観客の方々からもさまざまな意見をいただき、日本人はどうやって外国人のことを見ているのかも考えさせられた。

平成28年2月20日～21日

JICA横浜海外移住資料館に訪問させていただき、横浜中華街の視察や日系研修員との話し合い、また海外移住資料館での移民の紹介をとおして各国から日本に来た移民と日本から世界中に移住した人々の歴史を理解させていただいた。自分は移民の子孫じゃなくでも、将来はどうやって日本で学んだことと自分の国の文化を融合し、さらに双方のいいところが発揮できるようになるかについて深く考えさせられた。

県費留学生になってから間もなく半年が経った、奨学金のおかげで、日本の文化を体験することができ、各国から来た県費留学生たちとも出会って、素晴しい友たちができた。普段の学校生活であまり触れていない、沖縄人の移民の歴史、そして移民の子孫が直面している自我の身分についてのことも教えていただいて、台湾人として、複雑な歴史の中でどうやって自分の身分を認定するのかについても深く考えさせられた。

沖縄での生活をいつでも楽しんでいる。博士課程は想像より大変だったが、奨学金のおかげで、研究生活が楽になって、そしていろいろなこともできるようになった。今後もこれまでどおり、沖縄での研究生活を楽しんで頑張っていく。

私の人生を豊かにしてくれた沖縄

具志堅リジア春恵（ブラジル）
琉球大学

はいたい！私は具志堅リジア春恵といいます。沖縄系ブラジル人です。この一年間、琉球大学で日本語を勉強していました。また、日本事情、沖縄事情とうちなーぐちの授業を受けていました。

日本語を勉強し始めてから、7年になります。日本の音楽がきっかけで、日本語に興味を持つようになり、サンパウロ大学の文学部で日本語とポルトガル語を専攻していました。2年前に卒業しましたが、まだまだ日本語能力が足りないと気づいたので、日本に留学しようと思いました。

ウチナーンチュとしてとても恥ずかしいことですが、来沖する前は、沖縄は「暑い」「海がきれい」「サトウキビ畑が多い」ぐらいしか知らなかったです。それこそ、特に沖縄に留学したいと思った理由の一つです。日本語を勉強するためだけではなく、祖先のふるさとである沖縄のことをもっと知りたいと思い、県費留学に応募しました。

琉球大学で筆記テストと面接を受けてから、日本語の上級クラスである1組に入りました。日本語の聴解、読解、作文と講読の授業を受けましたが、その中で聴解の授業は特に印象的でした。ニュースを通して日本語を学ぶというのは面白いことだと思いました。ニュースには話題によって専門的な言葉が数多く出るので、新しい単語や漢字をたくさん学べましたし、ニュースの聞き取り練習をしたことで、日本語での聴解力が伸びたと思います。また、ニュースを通して沖縄・日本・世界で起きていることを知るようになり、沖縄及び日本の理解を深めることができたと実感しています。

教室だけではなく、公設市場、新聞社、神社、泡盛工場など、様々な場所を見学して日本語を勉強していました。その中でテレビ局の見学が特に興味深かったです。テレビでしか見たことがなかったスタジオに入り、カメラの後ろからニュースの放送

を生で見ることができ、貴重な経験となりました。また、アナウンサーとの面会でアナウンサーの仕事について色々聞けたので、大変勉強になりました。

日本事情の授業では、日本の歴史、社会や文化の成り立ちについて学びました。その授業で一番面白かったのは、いけばなの歴史の勉強といけばな体験です。いけばなは、ただ花をきれいに生けることではなく、生け方には意味があるし、花を生けることにより言葉で表せないほど深い感じになることが分かりました。

沖縄事情の授業では、清明、ハーリー、沖縄の伝統工芸、食文化、民間信仰などについて勉強しました。特に印象的だったのは、沖縄のお盆（旧盆）についての授業です。私の家族はブラジルでお盆を祝いますが、沖縄と異なるところがあると気づきました。沖縄事情の先生がエイサー道ジュネーを見に連れて行ってくださいましたが、それまでにエイサー道ジュネーについて何も知らなかったので勉強になりましたし、エイサーが好きな私にはとてもいい思い出になりました。

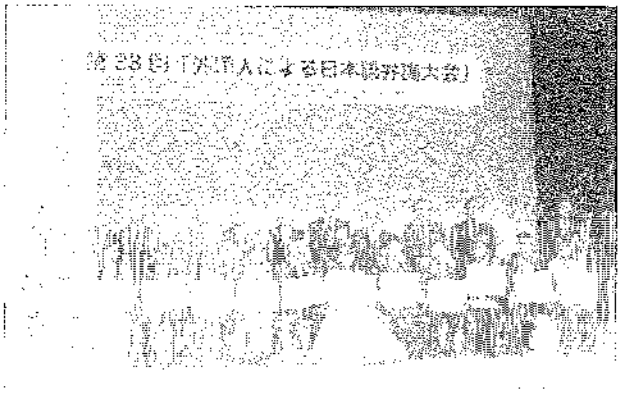
「琉球文化特別研究Ⅱ」と「うちなーぐちあしび」という授業でうちなーぐちを勉強していました。うちなーぐちは難しいですが、沖縄で勉強したいとずっと思っていたので、私にとって非常に興味深い授業でした。

この1年間、様々なことに挑戦してみました。たとえば、琉球大学で『竹取物語』の日本語劇に出演しました。劇に出演するのは初めてでしたが、いい経験になったと思います。劇は一人ではなくグループでやることなので、話し合いや思いやりの大切さに改めて気づかされました。

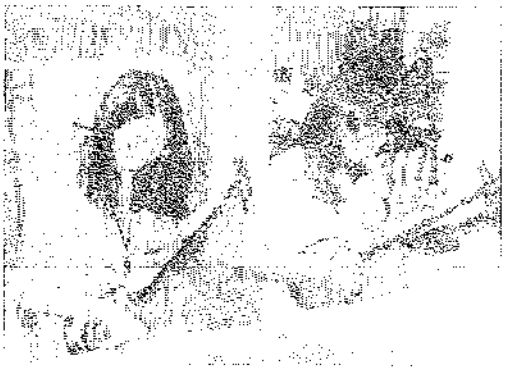
また、琉球大学の留学生による日本語スピーチ大会に参加しました。原稿を書くのは一番大変でした。テーマを決めた後、日本語の言葉で上手く伝えるようにどうやって書けばいいのか、どこから書き始めたらいいのか、とても悩んで

いました。先生と相談しながら、何回も原稿を直したり、練習をしたりしました。日本語でのスピーチ大会に参加するのは初めてで、上級の部で２２名の参加者がいたのでとても緊張していましたが、入賞することができとても嬉しかったです。

外国人による日本語弁論大会にも出場させていただきました。当日に先生方、友達、親戚も見に来てくれて、「感動した」「共感した」「スピーチよかったよ」などの感想を知らない人からも聞くことができ、嬉しかったです。私の伝えたかったことがちゃんと伝えられたのだと感じました。とてもいい経験になったと思います。

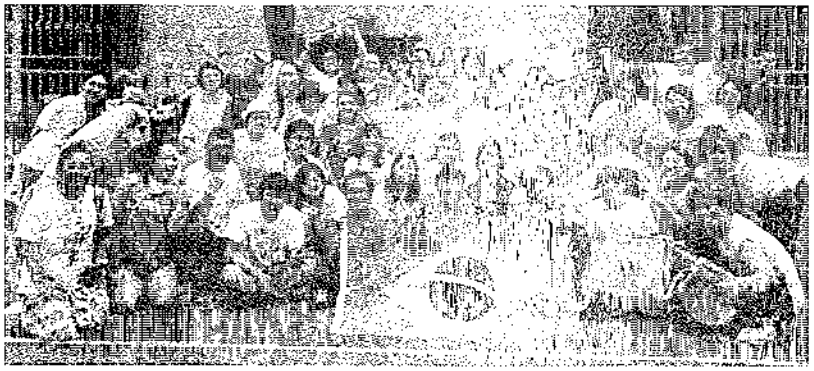


半年間ぐらい、三線教室に通いました。楽器を習うのは初めてで、最初工工四を覚えるのが難しかったですが、先生は親切に教えてくれましたし、楽しいので、諦めずに頑張っていました。「安里屋ゆんた」「島人ぬ宝」「涙そうそう」「三線の花」など、いくつかの曲を弾けるようになりました。また、三線教室のイベントや沖縄・兵庫友愛キャンプなどで三線のパーフォマンスをさせてもらいました。



沖縄の文化を触れる機会が数多くありました。ぶくぶく茶体験や沖縄伝統料理講座などに参加しましたし、「執心鐘入」と「花売りの縁」という組踊の作品を見に行きました。また、那覇祭りや安田シヌグ祭りなどの伝統的なイベントにも行きました。

ブラジルのことを紹介する機会もいくつかありました。その中で最も印象に残った三つのイベントを取り上げたいです。一つ目は、嘉手納町立図書館で行われた外国語絵本読み聞かせ教室です。ブラジルを紹介してからポルトガル語の絵本と、その日本語訳の絵本を子供たちに読み聞かせました。最初は緊張していましたが、とてもいい経験でした。二つ目は、ＪＩＣＡフェスティバルです。そのイベントでブラジルのものを紹介したり、家族の移民について説明したり、ブラジルに関するクイズやワークショップをしたりしました。三つ目は、うたの日コンサートです。ＢＥＧＩＮという沖縄のバンドのパーフォマンスでブラジルチームの一員として踊りました。私は元々ＢＥＧＩＮが好きで、ブラジルでコンサートを見に行ったことがありますが、あのときはいつか沖縄でＢＥＧＩＮと一緒に出演するとは想像もできませんでした。何よりも、自分の国を代表し、友達と一緒に参加したことが嬉しかったです。



私のルーツである沖縄に来てから、家族のことを学んだり、よく考えさせられたりしました。家族の移民についてのパネルを作るため、親戚から移民当時の話を聞き、写真や書類を集めました。私の祖母がブラジルに向かっていたとき妊娠していたこと、船で生まれたおばさんの名前はその船の名前から由来したことなどを初めて知りました。また、横浜研修で海外移住資料館を見学し、ブラジル移民のことをより深く学べました。ブラジルに関する情報や展示が数多かったですが、父が働いていたサンパウロ公設市場の写真や、ブラジル料理と日本料理が一緒になっている食卓の展示などを見て身近な感じがしました。

琉球大学で平和学習をし、沖縄戦や米軍基地問題などについて学びました。沖縄で初めて沖縄戦のことを聞いたとき、衝撃を受け授業中に泣いてしまいました。私の祖母が戦争を体験したことを知っていましたが、どんなことを経験したのか、詳しくは知らなかったからです。しかし、戦争体験者の証言を読んだり聞いたり、戦場だったアブチラガマを見学したことで、沖縄戦はどんなに恐ろしいことだったのか、少し理解できたと思います。ですから、今は祖母がそんなひどい経験をしたと思うと心苦しくなります。それまでは戦争は昔のこと、私とあまり関係ないことのように思っていましたが、平和祈念公園の平和の礎に刻まれたひいおじいさんの名前を目にし、戦争をとても身近に感じました。もし私が沖縄に来なければ、家族の移民や祖母が経験した沖縄戦のことをずっと分からないままだったと思います。

この一年間、多くの人と出会い、様々な場所に行き、知識を深め、自分自身が変わったことを実感しています。最も大きい変化は、ウチナーンチュとしてのアイデンティティが強化されたことです。今は、ブラジルだけではなく、沖縄も私のふるさとだと思っています。この留学を通して、私はブラジルウチナーンチュであることをとても誇りに思うようになりました。沖縄は私の人生を豊かにしてくれました。

【帰国したら．．．】

帰国後、教育業界を中心に日本語をいかせる仕事がしたいのですが、そのためにこの留学で学んだこと、経験したことが非常に役に立つと思います。１２月に受けた日本語能力試験Ｎ１の合格通知をもらったとき、この一年間で日本語能力を上達できたことを確認し、沖縄に留学したかいがあったと実感しました。

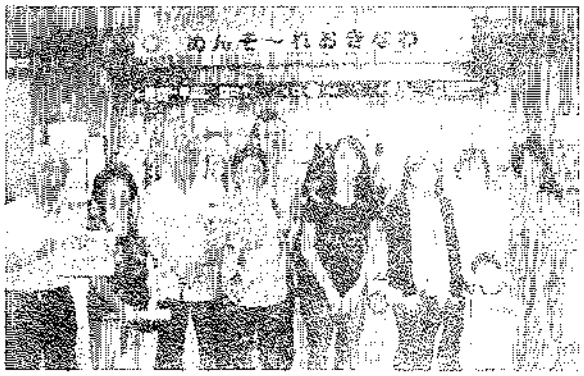
この一年間、留学生や日本人にブラジルについて色々なことを聞かれましたが、自分の国なのに分からないところが多いと気づかされました。ですから、母国のことをより正確で詳しく説明できるように、ブラジルのことをもっと勉強しようと思っています。

沖縄では20歳以上の人はほとんど車で移動します。私はもう24歳ですが、運転免許すら持っていません。今までは、それについてあまり気にしていませんでしたが、沖縄に来てから運転できる若者に憧れるようになりました。日本人の友達はあちらこちらに連れて行ってくれて大変お世話になったので、みなさんがブラジルに来たら、私も様々なところに連れて行き案内したいと思います。ですから、帰国したらできるだけ早く運転免許を取りたいです。

ブラジルに帰ってからも、うちなーぐちと三線の勉強を続けたいです。そして、沖縄で学んだことや経験したことをたくさんの人に伝え、ブラジルと沖縄の繋がりを強化するような活動をしたいと思います。

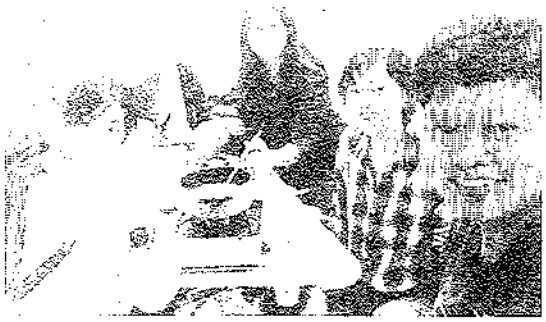
【出会いに感謝】

来沖する前は、一年という長い期間、家族や友達と離れて生活するのが不安でした。しかし、この一年はあっという間に経ち、ホームシックなどを全然感じませんでした。沖縄でさらに新しい家族と新しい友達ができたからです。



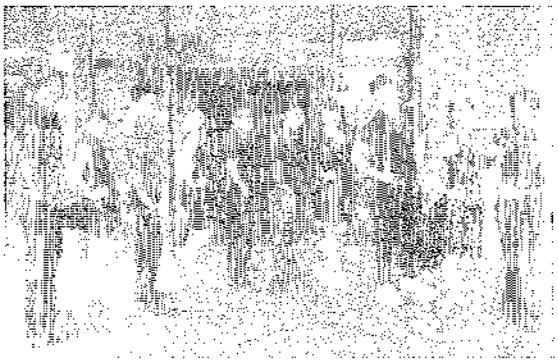
那覇空港に着いたとき、母方の親戚が迎えに来てくれていました。初対面なのに、とても優しくしてもらい、安心できました。次の日に、琉球大学の寮に引っ越しました。学生寮に住むのは初めてで、どんなところなのか、これからはどんな人たちと住むのか、とても心配していましたが、寮のみなさんは最初から優しく接してくれました。同じユニットの学生たちと仲良くなり、まるで家族のように、一緒にご飯を食べたり、おしゃべりしたり、協力し合ったりし、毎日楽しい生活を送っていました。

旧盆に沖縄にいる父方の親戚と母方の親戚を訪ねました。父方の親戚に会うのは初めてだったので、正直緊張していましたが、とても親切にしてくれました。「沖縄に来てくれて嬉しいよ」ということを言われたとき、私こそ嬉しかったです。沖縄にいる親戚に出会えてとてもよかったです。



この一年間、世界各国から来た留学生と暮らしたり、勉強したりすることで、異文化のことを学べましたし、新しいことにたくさん気づいたので、視野が広がったことを実感しています。世界中の友達を作ることができてとても嬉しいことです。

また、県費留学生、市町村の研修生や日系人との交流ができました。同じルーツを持っている世界中の人たちが同じ場所に集まり、学びや経験を共用することができ、非常に素晴らしいことだと思いました。一緒に楽しい思い出がたくさんできてよかったです。



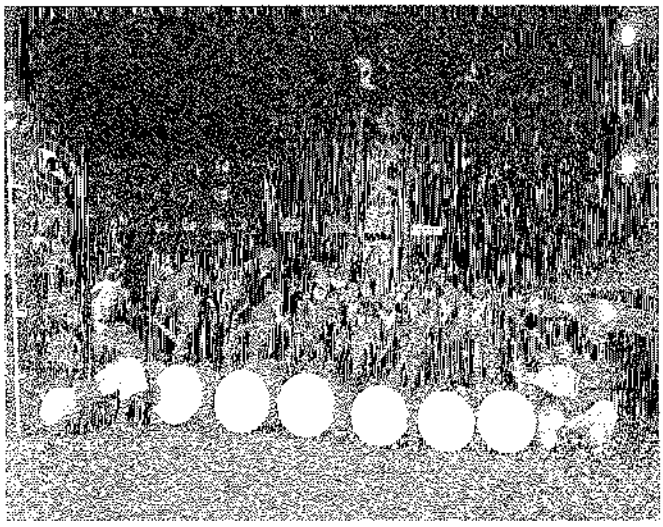
大学で留学生といる時間のほうが多かったですが、チューター、サルサのメンバー、沖縄兵庫友愛キャンプのメンバー、ＷＹＵＡのメンバーなど、沖縄で日本人との出会いにも恵まれました。皆さんのおかげで、ウチナーンチュの優しさと温かさを肌で感じることができ、いちゃりばちょーでーという言葉の意味がよく分かりました。

財団の方々、親戚の方、先生方、友達がいたからこそ、この留学は有意義になったと思うので、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。いっぺーにふぇーでーびたん。

沖縄で本当の自分に出会った

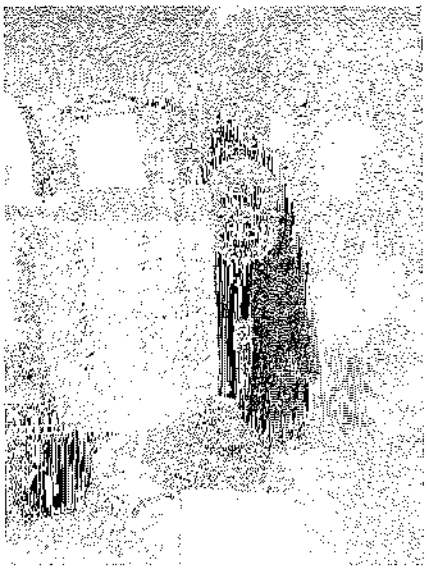
陳雯倩（中華人民共和国）
沖縄大学

私が沖縄の留学生活を初めて四年目になりました。もうだいぶ沖縄の生活に慣れてきました。10 月に県費留学生として、他の県費留学生と出会って、様々なイベントや学習会に参加して貴重な体験になりました。



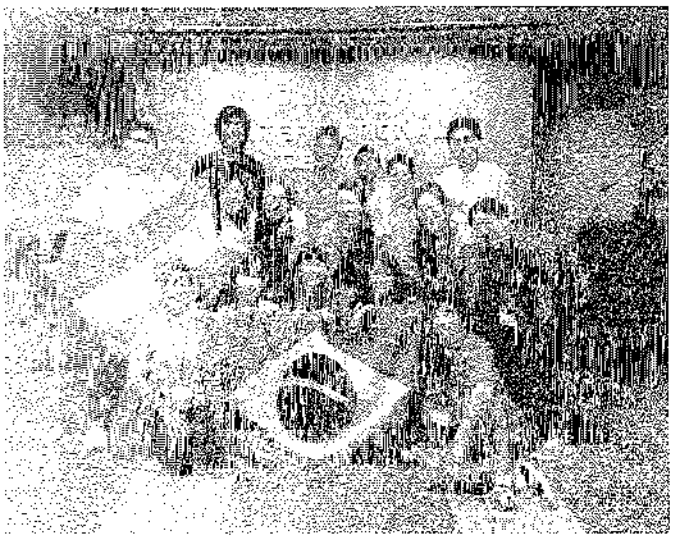
今年の 11 月は私が通っている沖縄大学の学園祭でした。去年からエイサー部に入って、もう一年間も練習しましたが、本番の時とても緊張しました。でも、他の皆さんの頑張っている姿を見て、学校の周りのお婆ちゃんお爺ちゃんも見に来てくれている姿を見て、初めて伝統文化の魅力を感じました。締め太鼓と大太鼓の皆さんは汗がぽたぽたと流れていましたが、いつもよりかっこよく見えました。

今年の四月福建省師範大学からの交換留学生と出会って、師範大学の閩琉エイサーというサークルのことを聞いて、自分が卒業して、故郷の福州市に戻った後、このサークルに参加したいと思いました。そのため、三線の勉強を始めました。



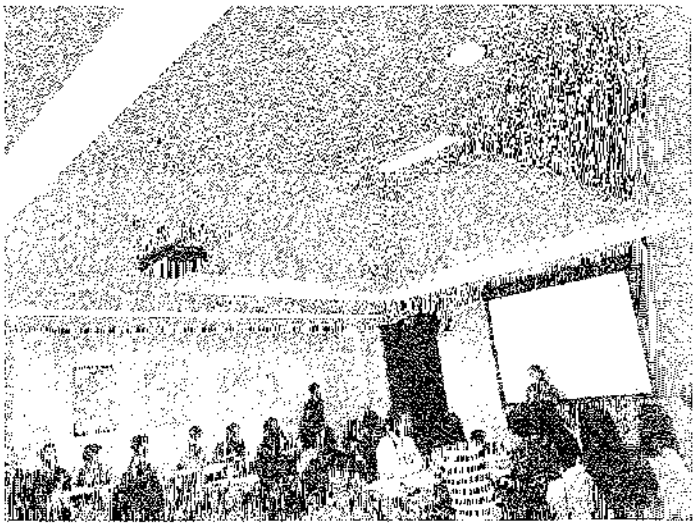
私が通っている三線の教室は那覇市の牧志にあり、三味線の師匠はすごく上手に方言が話せる人です。沖縄にいる四年間何回も三線を聞いたが、初めて工工四から学び始めました。一緒に三線を学んでいる人は、本州から転勤してくる人が多いです。逆に、ウチナーンチュが少ないです。これ

に対して私は嬉しくて悲しくて複雑な気持ちでした。沖縄の三線が様々な地域の人々に愛されていることが本当に嬉しいです。一方、ウチナーンチュに学ぶ人が少ないことが悲しいです。三線と民謡の美しさを色々な国の人に伝えたいと思います。私の故郷にも「三弦」と言う楽器があります。それは、沖縄の三線の前身でした。いつか、沖縄で三線を学んだ私と故郷で「三弦」が弾けるお爺ちゃんと一緒に同じ曲を弾くのが私の夢です。24 歳の私にとって、沖縄は第二の故郷のような存在です。私は自分の故郷を沖縄の人々に知らせる義務があるとともに、沖縄の文化を故郷の人々に伝える責任もあると思っています。

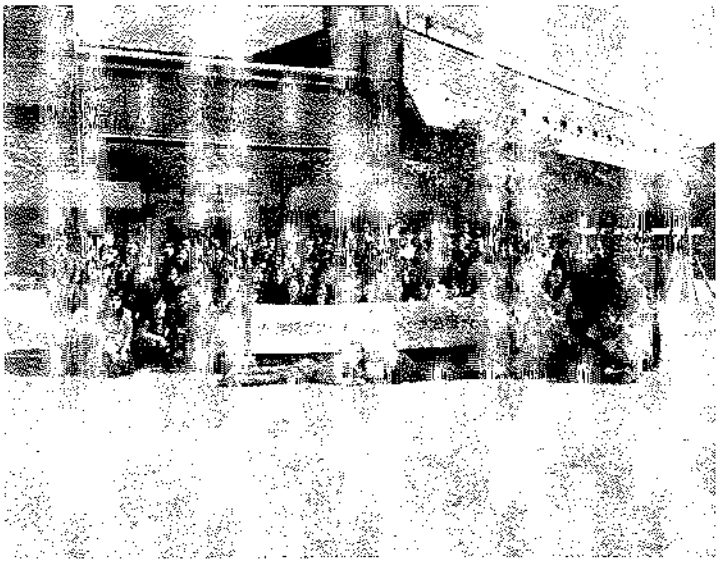


同月、JICA フェスティバルに参加しました。今まであまり気にしてない国の状況を知り、様々な国の文化を学ぶことができました。自分の視野はまだまだ狭くて、これから勉強すべきことがまだたくさんあると認識しました。JICA で、色々な国の人と出会って、沖縄でこんなに大勢な外国人が暮らしている事に吃驚しました。皆が頑張って勉強している、仕事をしている姿を見て、感動しました。今回の JICA フェスティバルで和服を着ました。エイサー部に所属しているため、よく浴衣を着る機会がありますが、和服を着るのは初体験でした。

12 月、「沖縄県・市町村等国際交流担当者連絡会」に参加しました。国際交流関係の NGO で働いている時光さんの講演は本当に勉強になりました。「多文化共生」の理念を初めて聞きました。自分の国の文化を守るとともに、互いの文化的違いを認め合うことは

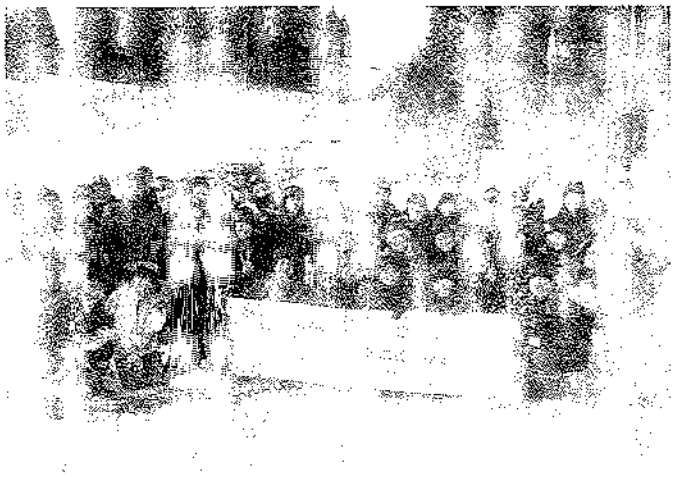


非常に大事なことです。同じ地域に暮らしている人々は、国籍や民族に関係なく、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくことが多文化共生ということを勉強しました。いわゆる、地域の包容性だと思っています。確かに、留学生として沖縄に暮らしている私には、今回の会議に参加してみて、地元の人々も外国人に住みやすい地域を築くように、頑張っていることが分りました。これから、私も沖縄が「多文化共生」を掲げる県になるために、自分の小さな力でも貢献したいと思います。

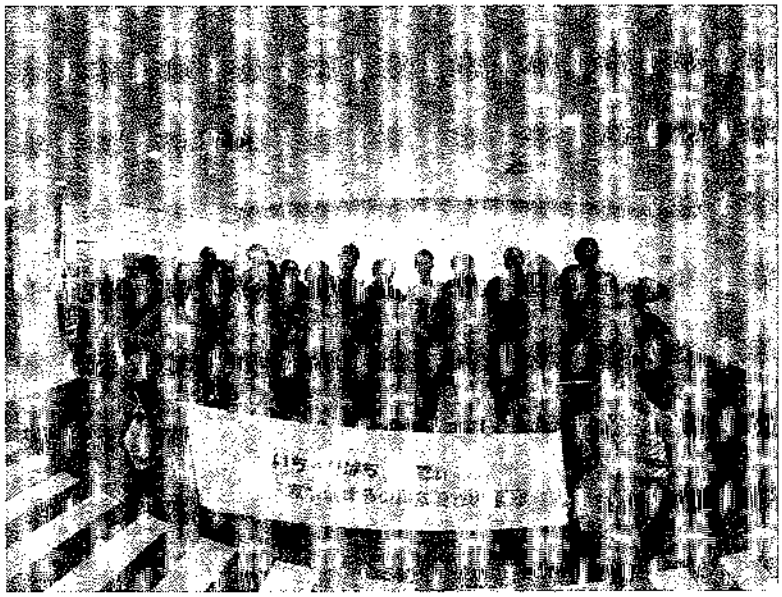


今年は暖冬ですが、12月の沖縄は段々寒くなってきました。上旬にグローカルリーダー大合宿に参加しました。たくさんの人と留学経験をとおして交流して、国際交流事業についても勉強しました。今回私のチームは高校生が多く、いつも笑顔で人と話している彼女たちからはとても暖かい感じをもらいました、本当に感動しました。

2月6日、日本語弁論大会が行われました、私はスタッフとして参加しました。留学生のみんなさんの素晴らしいスピーチを聞きました。平和についての望み、沖縄文化についての体験、又は異文化のコミュニケーションについての感想など。沖縄にいる私の心の底の声を伝えてもらいました。私も来年弁士として参加できるようにこれからもっと日本語の学習を頑張っていきたいと思います。



11日から14日までの四日間、兵庫県と沖縄県の友愛キャンプに参加してきました。充実



の四日間を過ごしました。兵庫県の皆さんと一緒にスキーをして、始めて雪を見た私はとても興奮しました。夜、皆と一緒にカニ鍋を食べました。皆と一緒に食べたから、いつもより美味しかったです。毎日晩御飯の後の交流会は私が一番好きな時間でした。皆と歌ったり、踊ったり、話しました。兵庫県の若者たちは異文化に対する包容性がすごくあると感じました。兵庫県立兵庫高等学校に見学に行きました。兵庫が生んだ沖縄の島守り・島田叡さんのことについて教えてくれました。沖縄県と兵庫県の深い交流の歴史についてもたくさん勉強しました。沖縄県と兵庫県は島田叡さんのおかげで今でも友好交流が続いています。「友愛とは友を愛すること」と兵庫県の皆さんがよくいっていました。兵庫県にいる友を愛している皆がいるから、沖縄県と兵庫県の友愛がずっと続いてくと信じています。兵庫県広域防災センターにも見学しに行きました、阪神淡路大震災についてたくさん映像資料を見ました、非常に驚きました。でも、現在の神戸の姿を見て、誇らしい気持ちは悲しい気持ちよりも大きかったです。そんな大きな災害を超えて、現在綺麗な神戸ができました。兵庫県の皆さんの勇気に感心しています。これからも兵庫県の皆さんは何の困難にも負けないと信じています。

2月20日－21日まで、JICA 横浜に研修に行ってきました。横浜中華街と海外移住資料館を見学しました。気温が低いですが地元と似ている所にいるから、心が温かかったです。中華街にい

る陸さんが横浜中華街の歴史について詳しく紹介してくれました。

大変な時期もあったけど、現在は観光地として、たくさん観光客が訪ねてきています。日本と中国の深い交流の歴史の証のような存在です。今回一緒に研修しに行った日系人の皆は、中華街の歴史の勉強を通して、どうやってこれから暮らす国で沖縄の文化を守るかということについてヒントが貰えたと思います。二日目海外移住資料館で沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュについて勉強しました。戦争の時期の沖縄の苦しさが分かったと同時に、今、側にいる日系人の友達が一所懸命沖縄の文化を学んでいて、ルーツである沖縄の文化を守りたい気持ちを強く感じました。

県費留学生としての半年、色々なイベントに参加したり、沖縄の文化を勉強したり、県費の皆と出会うことができて、とても幸せだったと思っています。短い間でしたが皆と一緒に色々なことを勉強する経験は私にとって宝のように貴重なものです。理解すること、学ぶこと、守ることそして継続することはこの半年で私にとって国際交流について一番勉強になったことだと思っています。理解して、学んで、守って次世代に伝える為、まず、自分ができるようにならなければなりません。それと同様に、何かを始める前に、能力を身に付けないといけません。留学生活はまだ二年間ありますが、沖縄と福建省の友好関係がいつまでも続くように、交流が非常に大事なことだと思っています。将来は故郷に帰った後、今まで勉強した国際交流の知識を活用します。国際交流事業に対して、私の力は小さいですが、小さくても私の故郷の福建省と沖縄の架け橋になるように、これから、もっと頑張って行きたいと思います。

おきなわと絆

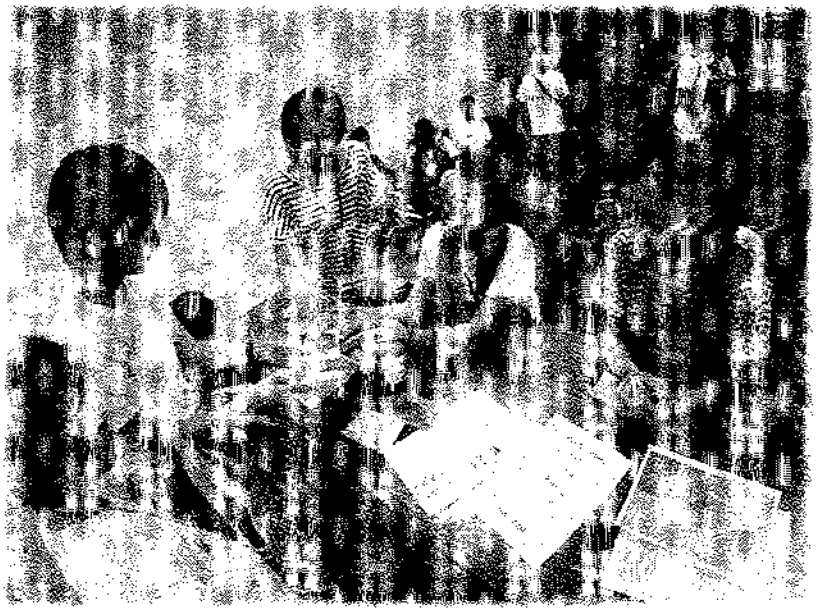
徐佩鈴（台湾）
沖縄大学

充実の半年間でした。二年前沖縄に来て、日本語の勉強ばかり忙しくて、あまり沖縄のことを深く学べなかった。沖縄大学に入って、日本語教員を目指して、日本語教員養成課程を取ることが決まった。そして、10 月からウチナンチュー子弟等留学生として、たくさんの体験をした。

養成課程のカリキュラムには日本語の構造、日本事情や日本人の言語生活等に関する知識と能力を身につけるため､文法、音声、語学などの授業を履修しないといけない。このプログラムの終了であっても、今の勉強を続けていって、日本語の教授に関する知識と能力を頑張っていく。

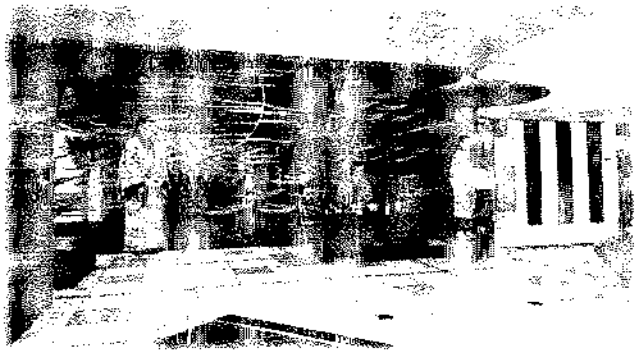
十一月外国語絵本の読み聞かせボランティアに参加した。子供たちに絵本を通して台湾の文化習慣などを紹介する。選んだのは「ねずみのよめいり」というえほんだった。子供の中にはこの物語を聞いたことある人が何人かいたが、話の内容は実は中華文化と深く関わっていることを子供たちに伝えた。

そして JICA 沖縄国際協力・交流フェスティバルを参加した。一ヶ月ぐらい事前準備をし、ワークショップの「言葉の通じない世界」を作り出した。フェスティバルにはブラジルや、南米、アフリカ、南アジアなど出身の人たちが各自の国家と文化を展示しており、また、沖縄での国際協力に関するブースにも展示していた。



沖縄大学では土曜教養講座が定期的に行われて、高畑勲監督が沖縄に訪れて、学内に講演した。高畑勲さんの著書「アニメーション、折にふれて」を中心に世代に伝えたいことを語っていた。数々の作品が台湾でも知られているので、せっかくの機会なので参加した。

毎年行われる外国人による日本語弁論大会には残念ながら出られなかったが、お手伝いと、他の県費留学生を応援しにいった。

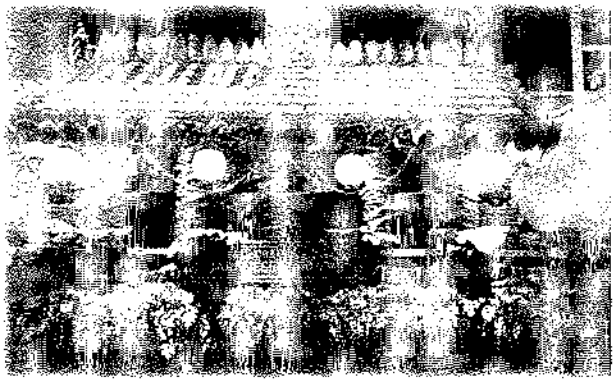


弁論大会でぶくぶく茶の初体験をした。

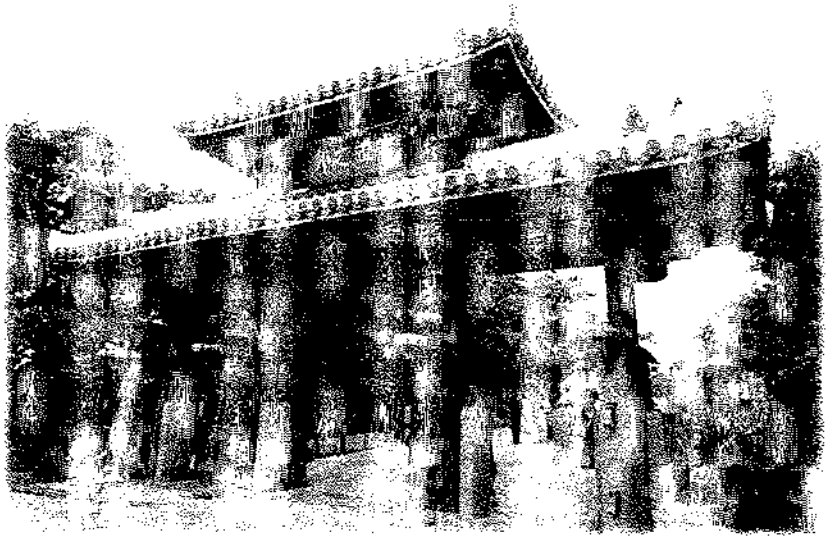
そして、二月の上旬から春期休暇が始まり、兵庫・沖縄友愛キャンプに行ってきた。なぜ兵庫なのだろうかと思いながら、このキャンプを通して、兵庫と沖縄の繋がりを認識した。兵庫県出身の島田叡さん、沖縄県最後の知事として沖縄住民のことを必死に保護していた姿を心の底から尊敬している。三泊四日のキャンプで、スキーをしたり、新たな出会いをしたり、お互い学んだことについて話し合ったり、足湯の体

験、大乗寺の見学、三木防災公園の見学などとても有意義なキャンプだった。

1泊2日の横浜研修は日本人海外移住資料館見学と中華街の歴史を認識することだった。移住資料館はハワイ、南米などの地域の日本人移住の歴史の資料が展示されており、また日系人がそれぞれの国や地域へどのような経験や貢献をしていたのか紹介されている。



このプログラム修了後、私はまだ沖縄で勉強を続けていくつもりだ。この半年間に、いろんな人と出会って、知識と経験を得て、沖縄のことをさらに好きになった。沖縄は小さな島だが、島人の心の広さが強く感じられる。沖縄のこと応援していきたいと思っている。また、兵庫・沖縄友愛のように、台湾と沖縄友愛の橋を築いていきたい。



地球兄弟

安座間上地ジョン喜智（ペルー）

沖縄国際大学

「私があなたに惚れたのは。。。」

まぶやー、仏壇、さーたーあんだぎーとか、そういう言葉を子供のときから結構聞いていたけど、本当に沖縄のことは全然わからなかった。沖縄に惚れて、「１９の春」ではないけど、沖縄との出会いは１５歳のときだったと思う。あの時、ペルー北中城村人会の１５周年記念日で、初めて三線を持って弾いてみた。三線のおかげでペルーの県、市、町、村人会の色々なイベントに参加することができて、エイサーや琉球舞踊を見て沖縄の文化に興味がでてきて、私もそれを学び始めた。

２００５年、北中城村の研修生として、初めて沖縄に来た。３ヶ月で日本語や沖縄の文化などを学んだ。あの時、日本語があまり出来なかったけどとても楽しかった。この短い時間で日本語がよく出来なかったのに、沖縄が好きだという気持ちが強くなった。「もし、日本語がもっと上手だったら、どうなるかな」とずっと考えていた。もっと沖縄のことを知りたいと思いながら、日本語を勉強して、そして、数年間、三線、エイサー、歌う活動をしてきて、２０１５年に、やっと夢が叶った。一年間、沖縄人の心を感じて、色々な生活や文化などの経験ができて、嬉しい。

「家族」、mi familia.

２００５年に北中城村の研修生として初めて沖縄に来た。あの時、仲宗根家と出会った。「親戚だよ」と言われたけど「どんな人かな」と緊張してた。でも、沖縄に着くと、とても暖かい歓迎させてくれて感動した。ウチナーチューの心とおもてなしを初め

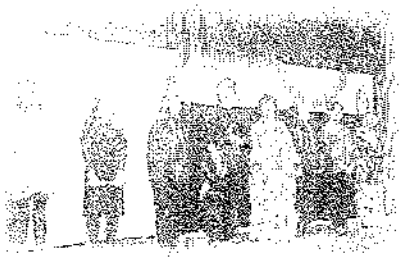
て経験した。その時から、この絆が強くなってきて、「僕の沖縄の家族だ」と強く感じている。きえいおじいちゃん、すずこおばあちゃん、そしてゆこねえちゃん、感謝の気持ちが多くて言葉が足りないと感じている。また、ゆこねえちゃんが色々教えてくれて、そして、アドバイスしてくれて、沖縄の生活が素晴らしい経験になった。みなさん、muchísimas gracias!

OKIKOKU、お世話になりました！

沖縄国際大学に最初行った日、僕はとても不安だった。自分の日本語能力に自信がなかったから、先生達と学生達とうまくコミュニケーションが出来るか、仲良くなれるか、とても緊張してた。でも、国際交流センターの人達と先生達がとても親切で色々指導してくれて、大学の生活がもっと楽になった。

日本語の授業で文法や作文など、そして今まで全然知らなかった日本と沖縄の歴史と文化を学ぶことが出来て、とてもよかった。また、後期のうちなーぐちの授業の比嘉光龍先生はとても面白い人で沖縄語の歴史と現在のことについて教えてくれた。本当に勉強になった。いっぺーにふぇーでびたん。

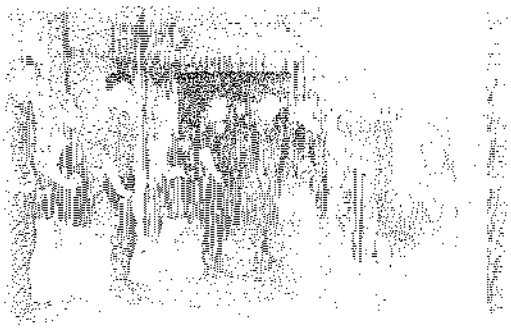
ケリ先生の後期日本語の授業で「桃太郎」の劇を留学生たちと発表した。 僕は経験があまりなくて、そして恥ずかしかったけどチャレンジしようと思って、桃太郎のキャラクターを演技をした。そして、私たちが少しギャグを入れて、とても楽しい経験だった。



授業で、ネパール、ベトナム、台湾、マカオ、中国の留学生、一緒に日本語を勉強した友達へ、皆さんが明るくて、授業をいつも楽しくしてくれて、ありがとうございます！

2015 年に出来たばかり国際交流サークルのおかげで、外国人の留学生と日本人の大学生と交流が出来て、仲良しになって、いっぱいいい友達ができた。韓国、中国、マカオ、台湾、フランス、香港、ネパール、インドネシア、ペルー、沖縄。違う国、違う文化、違う言語。違うけどみんなが優しい心を持って、みんなと友達になって、本当にみんなと出会えてよかった。

国際交流が出来るように色々なイベントを考えた。その一つはサルサだった。私はサルサが好きで、このサークルの友達を誘って、グループが出来た。毎週 2 回練習して、11月の沖国祭で発表した。みんなは、前まったくサルサのことを全然分からなかったけど、踊れるようになって、本当に嬉しい。



音楽大好きで、ＮＭＣニューミュージッククラブに入った。ＮＭＣのおかげで日本のサークル活動を初めて体験できた。クラブイベントの準備とやり方、先輩と後輩の行動を習ったり、大好きな音楽をシェアしたり、楽器を学んだり、ミュージックを楽しみながら友達になろうという気持ちで生きて行って素晴らしいと思った。それを見ると僕も音楽に興味が強くなって、もっと音楽活動で頑張って行きたいと思う。

沖縄国際大学の皆さん、お疲れ様でした。一年間ありがとうございました。沖国大でよかった。

Un año en 沖縄

沖縄にきて、日本語を勉強すること以外に色々な文化的で国際的なイベントにさんかした。

8 月に、家族と一緒にお盆のうんけーとうーくいをして、道ジュネーエイサーを始めてみた。園田エイサー青年会のパフォーマンスを見るとエネルギーがすごくて、感動した。また、お正月に初めて初日の出を見て、初詣も体験できた。

11 月に JICA FESTIVAL に県費たちと一緒に参加して、ペルーのブースにも参加した。そこで、ペルーの「マリネラ」と「フェステーホ」という伝統踊りを発表した。

世界のうちなーんちゅーと関係がある活動もよくしていた。ＷＹＵＡ（世界若者うちなーんちゅー連合会）と市町村の研修生たちと交流して、一緒に沖縄の歴史や伝統文化を学びながら、楽しい時間をすごして、いっぱい思い出を作った。この出会いから強い絆が出来て、みんなが自分の国の架け橋になれると思っている。

夏（2015 年 9 月、沖縄県）と冬（2016 年 2 月、兵庫県）の友愛キャンプに参加した。夏に参加者が沖縄で集まって、冬に兵庫で集まる。戦争のことについて勉強をして、兵庫県と沖縄

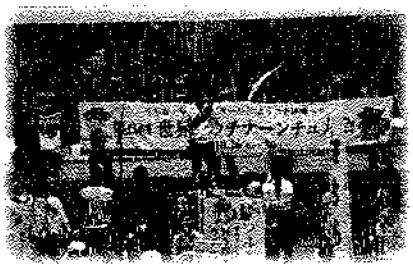
のつながりがあると学んだ。出会った参加者のおかげでこの「友愛」を感じた。素晴らしい人と友達になって、嬉しい。

La música, alimento del alma

今年、音楽的な年だった。音楽のおかげで、色々なイベントに参加して、いっぱい音楽の友達ができた。

音楽活動について、そして、ウチナーチューの関係でうるまラジオとＲＢＣラジオにも誘われて、面白い経験になった。

沖縄で初めてワンマンライブした。一人でライブが出来る自信が、今までなかったけど、色々な人が応援してくれて、やっとできた。2時間ぐらいのショーで、緊張してたし、とてもきつかったけど、いっぱい親戚と友達が来てくれて、最高だった。



また、プラザハウスと新しいライカムのショッピングモールで歌って、有名な桜坂劇場とほかの居酒屋でライブすることが出来て、とても素晴らしい経験ができた。デージー楽しかった。そして、第30回北中城しおさい祭でバンドをくんで、発表することができて、夢のようだった。

沖縄にきてから、あっという間に過ぎようとしている。去年の4月に県費留学生が県庁に挨拶に行ったのが、つい最近のように思える。

色々な経験と学びの一年だった。嬉しい，楽しい、そして時々ストレス、時々寂しい、悲しいと感じた。生まれた国とは、違う文化、習慣、言葉を持つ国で、初めての一人暮らし。時間やお金や、ゴミだしなど、背負いました。

この一年間を振り返り、写真を見ていると、楽しそうな写真ばかりですが、そこにはうつらない人と人の関係も深く考えなければいけない場面があった。「日本人だから、沖縄の人だから、外国人だからしょうがない」と、今まで、単純に思っていたことも、お互いの国の歴史、文化、バックグラウンドを知ると、より深く理解することが出来た。私はこの一年で、成長することが出来たと思う。

沖縄県、財団、そして、ペルー沖縄県人会に、県費留学生として選んでくれて、とても感謝している。私はペルーに帰って一年間で学んだ、理解、感じたことをペルーの皆さんに伝えていきたいと思う。

みなさん、私が「いちゃりばちょうで」の心は忘れない。また、世界のどこかで会いましょう。いっぺーにふぇでーびる！

自分のルーツを大切に

宮城ニコーリさおり（ブラジル）
名桜大学

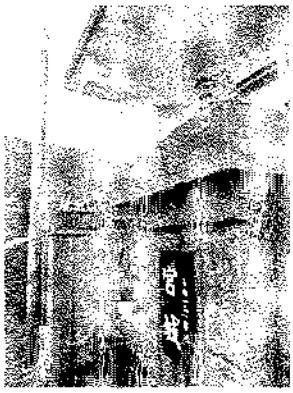
私はブラジル出身で、沖縄系２世です。実家はサンパウロ市のビラカロン地域にあります。

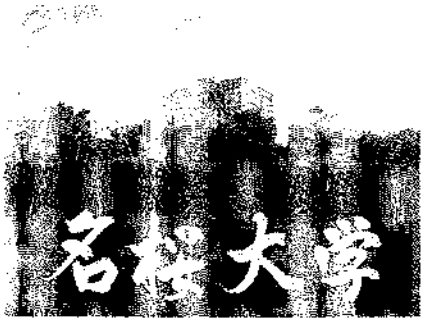
ビラカロンには多くのウチナーンチュが一世から四世にいたるまで住んでいて昔ながらの沖縄文化がまだ多く残っています。実家でも子供の頃から母が毎日ブラジル料理と違う料理を作ってくれたり、家事をする時は面白く、独特な歌い方のテープやCDを流したりしてくれました。また、両親とオジーは私が見ていた日本アニメと違う日本語で話していましたし、家族から家の仏壇を大事にすることを学んだりもしてきました。このような様々なことがらが沖縄の伝統家庭料理、民謡、言語や信仰であったということをあの頃の私は全然知りませんでした。しかし、ある日、「さおりは日本人ではなくて、ウチナーンチュだよ」と母に言われました。その日から段々、日本語とウチナーグチや沖縄料理とブラジル料理の区別が出来るようになってきました。そして、大人になるにつれて、ブラジル社会や日系・沖縄コミュニティーの生活の中で、それぞれの文化の違いが明確になり、「自分はやっぱりウチナーンチュだ」と強く感じられました。さらに、沖縄で生まれてはいませんが、沖縄を家族のように自分の故郷として好きになりました。また、ブラジル人・日系人としてより、ウチナーンチュとして誇りを持つようになりました。

そして、2012年のブラジルでの第１回世界若者ウチナーンチュ大会では、活動を通して、他国のウチナーンチュと交流をしながら、皆から沖縄のことや移民を学びたいという意志を持って参加しました。この大会でイチャリバチョーデのように参加者とすぐに仲良くなれて、友達も出来ました。一方で、私は沖縄本島についての知識が浅いと分かってきました。例えば、沖縄県の中でも市町村や集落など地域ごとの区別を大事にしていることがあります。もう少し詳しく言えば、私の両親の場合、父は国頭村出身で母は名護市出身であるということがわかるようになりました。また、移民のことを詳しく聞いて、私はウチナーンチュであるにも関わらず、自分の家族のルーツについてまだ知らないこ

とが多いとわかりました。このことが、自分自身のルーツやアイデンティティーについて考えるきっかけとなりました。また、このウチナーンチュ大会がきっかけで、より一層、沖縄の親戚やウチナーンチュ大会で出会った沖縄にいる友人たちに会いたいと強く思うようになりました。

そして、2014 年に沖縄へ行くことを決め、一人で一か月間沖縄の親戚や友人に会いに行きました。親戚に会ったのは、記憶にないくらい昔のことなので不安もありましたが、親戚のおじさんやおばさんが、私のことを娘のように受け入れてくれ、また、いとこたちは兄弟のように仲良くしてくれたので、安心したのと同時に嬉しい気持ちでいっぱいになりました。初めて出会った親戚と同じように、出会うとすぐに家族の絆を強く感じました。わたしは、この旅の際に、父方の親戚や父が生まれた“与那”を訪ねることを決めていました。父はいつもヤンバルの“与那”出身であると言っていましたが、初めは“与那”が何のことかわかりませんでした。しかし、親戚の家を訪ねて、ようやく“与那”が集落の名前であることがわかり、とても感動しました。しかしながら、自分のルーツや沖縄についての全てを理解しきることは、この一ヶ月という短い期間では足りないし、以前よりも知りたいことが増えていき、もっと沖縄で勉強したいと考えるようになりました。そこで、自分の力でルーツを探す中で、成長していくためにも沖縄留学をしようと決心しました。そして、今回ウチナーンチュ子弟等留学生として、沖縄県に学びにくることができました。





沖縄県の大学の中でも沖縄県最北端にある名桜大学を選んだ理由は、私の家族のルーツが北部にあるからです。大学では、日本語の授業や沖縄に関する授業を中心に受講しました。日本語に関しては、日常会話だけではわからない書き言葉が授業を通して学べたので、沖縄へ来て半年で来る前のレベルでは到底受からないと思われていた日本語能力試験の 2 級を取得することが出来ました。沖縄についての授業では、沖縄の歴史や文化、現代社会

などを学びました。そして、実際に自分が生活していく中で授業内容の理解を深めることが出来ました。父がよく言っていた“やんばる”と言う言葉の意味も、授業を通して知ることが出来ました。また、今までは見て楽しむだけで自分が実際に踊るとは思ってもみなかった琉球舞踊にも名桜大学に授業があったおかげで挑戦することが出来ました。名桜大学外では、三線を習いに行きました。今までは、踊りたい、弾きたいと思っていなかったこれらの伝統芸能を実際にやってみて、観るよりもやる方が楽しいと感じ、いつも仲間と共に時にはゆんたくも交えながら、技術を高めることが出来ました。琉球舞踊は、最後に名桜大学の忘年会で他の名桜生たちに披露することができ、達成感を感じました。また、三線に関しては、この一年間を通して、幾度か披露する機会がありました。他の沖縄県民や大学生など様々な人々の前で、市町村研修生や県費の仲間たちと共に弾くことが出来き、琉球芸能の素晴らしさを皆で感じ、共有することが出来ました。また、外国のウチナーンチュにも沖縄県民に負けない、ウチナ―ンチュの文化や魂があるということを伝えることが出来たと思っています。

名桜大学で行われた沖縄県ウチナーンチュサミットや県内の様々な交流会イベントを通して、ブラジルのウチナ―ンチュコミュニティーについて伝えることができ、また、逆に他の国々のコミュニティーについても学ぶことが出来ました。来てくださった方々と、アクティビティーなどを通してお互いについて話し合う機会があり、お互いの社会やコミュニティーについて理解し合うことが出来ました。私にとって、同じウチナ―ンチュとして、日本のウチナ―ンチュに海外のウチナーンチュについて知ってもらうことはとても大切なことで、このような交流を通して世界中のウチナ―ンチュの繋がりが少しでも強まってほしいと強く願っています。そのため、これらの交流活動は私にとってとても意味のある活動でした。

名桜大学にきて驚いたのは、ポルトガル語研究会というサークルが存在していたことです。ブラジルやポルトガル語に興味のある学生たちと活動していく中で、改めて自分がウチナーンチュの誇りと同じくらいブラジル人であることの誇りを持っているということに気付きました。名桜祭では、サークルのみんなでブラジル料理の屋台を出し、他の名桜大学のブラジル人と共に料理を売ったり踊ったりしてブラジル人魂を発揮しました。

学外の活動では、JICA 横浜で移民についての研修に行きました。そこで出会ったブラジル日系人の言葉が私の心を動かしました。彼女は、ブラジル人 100%＋ウチナーンチュ 100%で 200%なので自分のアイデンティティーをブラジルと沖縄で分ける必要はないということや、２つの文化をもつことはとても貴重で素晴らしいことなので悩む必要はないということを教えてくれました。私はそれまで、自分のアイデンティティーについて悩んでいましたが、彼女の言葉を聞いて、直感的にこれだ！と思い、気持ちが楽になりました。また、彼女は日常の中で親たちが伝えてきた一つ一つのことを大事にして感謝することの大切さも教えてくれました。そして、自分の基盤となるルーツを自分自身がしっかり理解していれば、自分をしっかりと持ち続けることが出来ると学びました。

学校や活動の無いときは、読谷の伯母の家に泊まりに行き、沖縄の一般家庭の生活を体験することが出来ました。ブラジルで両親や親戚が一生懸命伝えてきた伝統と同じことを伯母がやっているのを見たとき、ブラジルの両親や親戚たちがウチナーンチュ魂が絶えることのないように頑張ってくれているということを改めて感じ、感動と共に感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、自分自身もこれからウチナーンチュの伝統や魂が枯れることのないよう、引き継いでいきたい、と強く思いました。

今回の留学で初めて親元を離れ一人で生活をしたのですが、一人暮らしでは、すべてのことを一人でこなしたり、これから自分が進む道について考えたりして、自分自身を成長させることが出来ました。私には、ボリビアや内地にも親戚がいて、親や親戚から家族の絆を大切にすることを教えられてきました。これまでは、私としては、家族や親戚の絆は強いはずなのになぜこんなにもバラバラの場所に離れて行ってしまったのかと思い、悩んでいました。自分自身についても、自分が何者なのか悩み前へ進めなかっ

たのですが、沖縄に来て、自分のルーツを知るために家族の移民歴史を学んでいくうちに、みんなそれぞれ自分自身で道を選び、その道をしっかり歩いてきたと理解することができました。今は、沖縄留学によってしっかりとルーツを理解し、新たな一歩を踏み出すきっかけになったので、私も家族の絆を大切にしながら自分の人生もしっかりと歩んでいきたいと思います。

留学は終了しますが、ここで得た学びを大切にし、ブラジルでもさらに学びを深めていきます。また、ブラジルに帰国したら家族の企業を支えながら、ブラジルのウチナーンチュコミュニティーに沖縄で学んだことを伝えていきたいと考えます。これまで海外に移民してきたウチナーンチュがどれほど苦労して

きたかわかりません。その苦労の中、ここまでウチナーンチュの文化を伝えてきてくれた人々に感謝したいです。また、この一年間で出会った人、学んだことをこれからもずっと忘れず大事にし、この思い出を糧にこれからも頑張っていきたいと思います。最後になりますが、この一年間一緒に暮らした家族、寮の友達、県費留学生の仲間と出会えたことに心から感謝します。

いっぺーにふぇーでーびる。Muito obrigada!

僕と沖縄

新井ブライアン隼人（カナダ）
沖縄県三線製作事業協同組合

僕はどれぐらいこの島を知っているんだろ、分からない。

僕は8年前に沖縄に十日間沖縄を観光をしました。その短い時間で首里城、平和祈念公園、琉球大学に行きました。僕はその十日間琉球大学でえいさーをやったり平和祈念公園で第二次世界大戦の苦しい時を学びました。当時の僕は沖縄の歴史を知らず楽しんでいました。それから7年後僕は親から県費留学プログラムにおうぼしたらと聞かれました。僕の兄は4年前県費留学生として留学しましたので僕が入れるか入れないか自信ありませんでした。うんのおかげで受かりました。そして4月からは沖縄県の県費留学生として来ました。僕は三線製作を選び、1年間三線の世界に入りました。沖縄の三線組合に入り、僕は枝川先生の店でお世話になりました。そこで僕は三線の歴史や作り方、そしてけいこも受けました。なぜ僕は三線製作を選んだかと色んな人から聞かれました。その答えは僕が十三歳の時に沖縄にいた時琉球大学で少しえいさーをして三線の音に惚れました。えいさーの雷のようなたいこと踊る人の力を全力を出す叫びの中で小さな音を聞き興味を持ちました。その音は大きくない、小さくない、だが低い音と違い高い音と違い優しい音でした。僕はその優しい音が好きでした。その優しい音にひかれ三線に興味を持ちました。

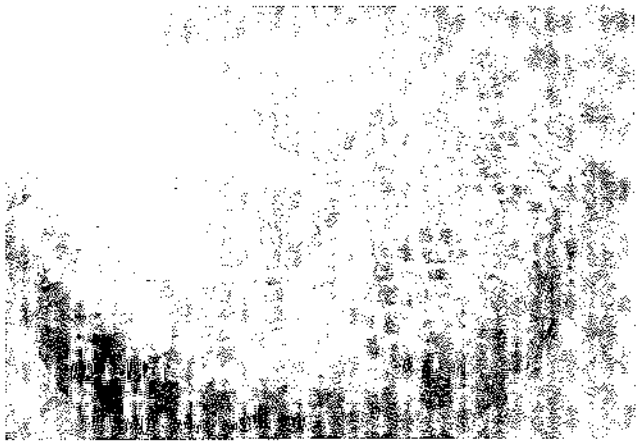
それから僕は枝川先生の店で三線の作り方やけいこを受け三線の形しゅるいや音楽の流派を学びました。そこで僕は先生に初め会った時、僕は先生にいい三線は何年かかるんですかと聞き先生は「芸能は人それぞれだから」と言いました。僕は感動しました。その感動の気持ちを持ち三線せいさくに使いたいと思いました。始まりは人口かわを作りそしてさお作りに入りました。木を削る作業は高校の時に少しやりましたけど、楽器をつくる木削りはやった事はないです。せいさくの後は僕は三線を弾くけいこを毎週火曜日の夜でやっていました。そこで先生の生徒さんと会い仲良くなりました。この時僕は沖縄の人ってなんと優しいんだと思いました。たとえ僕があんまり日本ごを喋れなくても皆さんはとっても温かい気持ちを僕は受け入れました。その温かい気持ちは沖縄の人だけじゃなくて県費留学生の皆さんも同じで僕は感動しました。留学生の皆さんと会う前は僕はとっても不安でした、僕は人見知りなのでとっても心配していました。だがみんなは優しくてうれしかったです。

僕は友達の家族の歴史や国の事を聞き、いつか皆さんの国に行きたいと思いました。皆さんの話を聞いて僕は自分の家族の歴史に興味を持ち、僕のおばあさんの所に行きました。そこで学んだことは、やく百年前僕のひいひいおばあさんはカナダに移民したと聞きました。驚きました。ひいおばあさんの時に移民したと思っていました。その事を習い僕は少しずつ家族の事を勉強したいと思いました。沖縄の家族と話し僕は三線せいさくと三線の弾きかたも学びました。僕は沖縄に来る前に三

線を全然弾けませんのでいつも緊張しました。初心者である僕は枝川先生にコンクールに参加して見ろと言われ、参加しました。そして僕は先生のスパルタのレッスンを受けました。厳しい時もありましたけど、先生の愛情は分かりやすかったので僕は気にしませんでした。三線を4月に始め、7月にコンクールに出演し僕はコンクールに弾く曲あはぶしを朝、昼、晩、夜、弾きました。そしてコンクールの日僕は胸をはって弾きました。結果は落ちました。少しはへこみましたけれど、周のに人たちは僕をはげましてくれました。

沖縄の人は優しいです。

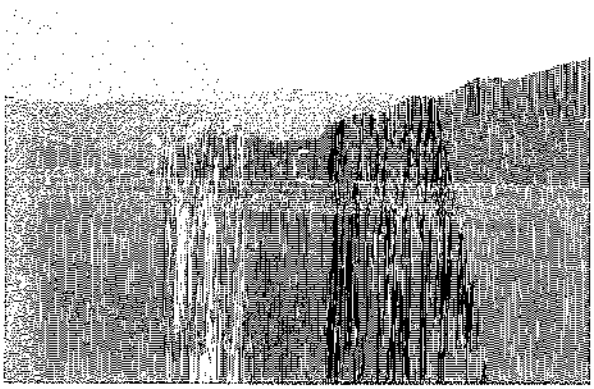
コンクールも終わり僕は三線せいさくに集中しました。時々店の中見て先生の三線作りを見て僕は感動しました。こんな近くで、沖縄の伝統芸能が誕生するのは多分沖縄の人さえ見たことない思います。沖縄の凄い所は伝統芸能が百年以上経っても現在に存在してることだと思います。



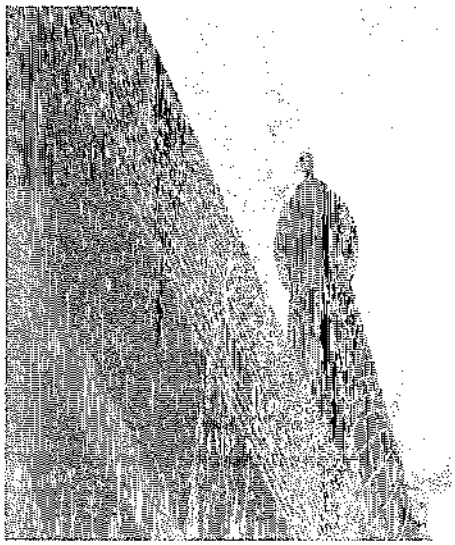
先生の仕事を見て僕も頑張りたいと思いました。7月の終わりに僕の初めての三線が完成しました。人生初めて楽器を作って感動しました。自分の手で一から初めて完成するまで作るのは本当に凄い気持ちでした。

一丁目を完成した時の感想は今でも覚えています。作った三線はできるだけ弾いています。完成した後は僕はお母さんの実家、秋田と東京に行きました。一つのりゆうは家族に会いそしてもう一つのりゆうは沖縄とどう違うか見たかったからでした。6年ぶりに秋田に行き僕は久しぶりにお爺さんとおじさんに会いました。いつも変わらない村にいて僕はこう思いました、秋田は沖縄みたいに自然が多くて癒

されました。秋田も沖縄と同じく優しい年上の方もいて毎日平和でした。そして東京に行き、那覇と違い東京は世界の中での都会を代表する所だと思いました。秋田と沖縄と違い東京はいつも忙しくて驚きました。県外から戻った時僕は沖縄は平和だと思いました。

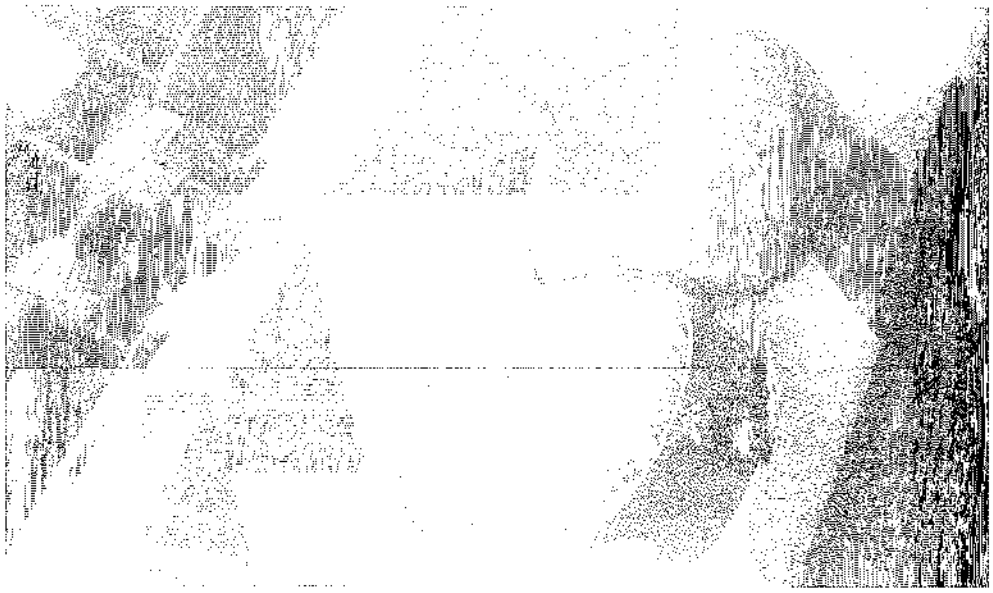


秋　田　の　畑



東京スカイツリー

沖縄に戻った後二丁目の三線を始めました。今回はできるだけ一人で、先生に言われ、挑戦して見ました。僕はできるだけ作っていましたけどとても遅かったでした、その遅さのせいで3丁目はできませんでした。2丁目は2016年の2月に完成しました。



一丁目と二丁目がならんでおります

僕はこの一年間で沖縄の文化とか歴史とほかの国の方々と会いました。おかげさまで僕は沖縄の事を前より好きになりました。十三歳の自分と比べ僕は沖縄の暗い過去も習い気持ちが少し痛かったでしたけど、年上の方々と子供たちの笑顔を見て、元気になりました。沖縄の人たちの笑顔は沖縄の朝日みたいでとても明るくて周りの人を元気する力だと思います。その力を受け僕は辛いときでも前に進める事ができたと思いました。小さい島でありながら世界の人たちがあつまってお互いの文化を学んで少しずつ新たな文化が始まると思います。三線だってもともと中国からきて琉球王国にきて少しずつ変わって沖縄の伝統芸能を代表する楽器になりました。僕は沖縄に来て南米や、ヨーロッパや、アジアの方々に会えて勉強になりました。沖縄は世界に会えるしまだと思いました。海外の人から三線の事を聞き僕はびっくりしました。たとえ沖縄からはなれても 三線を弾いてる人や作ってる人がいることは凄いと思いました。三線の音は僕にとって、心に響く楽器だと思いました。僕は帰国した後三線をカナダでも弾いてまた沖縄に戻ってお世話になった人の前でまた弾きたいです。

オキナワから沖縄へ～文化の継承を求めて～

金城晃アレックス（ボリビア）

松本料理学院

ハイサイ！ぐすーよちゅーうがなびら！わんねー金城晃アレックスやいびん！ゆたしくうにげーさびら！！オキナワといっても沖縄県ではなく地球の反対側の南米ボリビアにあるコロニアオキナワです。

僕の故郷コロニアオキナワは61年前に新たな暮らしを求めて約2か月の船旅を経てボリビアにたどり着いた人たちが作りました。始め、目の前には広大なジャングルが広がっており皆で力を合わせ木を切り倒しながら最初の移住地「うるま移住地」が誕生しました。しかし、原因不明の熱病「うるま病」が蔓延、さらには近くの川が氾濫を繰り返し、とても暮らしてはいけず二度の大移動を経てようやく現在の移住地にたどり着き、これからの成功を願い「コロニアオキナワ」と名付けました。

僕に沖縄を教えてくれた
ひぃおばあ

そのオキナワで僕は生まれた僕は当たり前の様に日本語を話していましたが実は 4 歳まで日本語を全く話さなかったそうですが、祖母からもらった一つのビデオテープを毎日のように見て日本語を覚えていったと母に聞かされました。今思えば祖母がそのビデオをくれなければ今みたいに日本語を話せなかったでしょう。

そんな僕が「沖縄」を知ったのはひぃおばぁの話からでした。夜になると外で夜空を見上げるひぃおばぁの隣に座ると沖縄の話をしてくれました。話のほとんどが戦争の話でした。家族を連れ米軍から逃げ回り、食べ物を探しに山奥へ行ったり、恐怖で夜も寝れなかったと聞きました。当時はあまり理解できなかったで

すが時折涙を浮かべながら話すひぃおばぁの話を聞いて「ひぃおばぁは本当に大変だったんだな～」と思いました。

僕の中での沖縄のイメージをガラリと変えた出来事があります。それはテレビで放送していたドラマ「ちゅらさん」です。今まで戦争があった場所としか認識していなかった沖縄ですがドラマを見ると「なんて綺麗なうみなんだ。自然がいっぱいなんだ。」と思いました。ひぃおばぁはこんな綺麗な場所で暮らしていたのかと。海のないボリビアで生まれ育った僕にとって初めての海の映像だったので感動したのを今でも鮮明に覚えています。そしていつか絶対にこの場所に行きたいと強く思いました。

それから地元のコロニアオキナワ第一日ボ学校に入学し、小学 5 年生から中学までの 4 年間（当時ボリビアでは小学校 5 年、中学校 3 年そして高校が 4 年間だった）でより深く沖縄について学びました。主な理由としては沖縄県からの派遣教師との授業が増えたからです。特に中学最後の 2 年間は担任が派遣教師の方だったので沖縄についてたくさん知る事ができました。しかし、当時思春期ど真ん中だった僕は先生の話などはあまり聞いていませんでした。祖父母の出身地を聞くという宿題を出されたときもクラスにいとこがいたので次の日に学校でいとこに聞いていました。そうやって学校生活を送りながらも心のどこかでは沖縄へ行きたいという思いは捨てきれませんでした。毎年夏に行われる「ジュニアスタディツアー」に応募したいと親に頼んでも断られました。どうせ行くなら最低半年の研修に応募しなさいと言われ、その時をじっくり待つことにしました。

そんなやんちゃな中学時代を終え、高校に進学し、改めて当時を振り返えることの大事さがようやくわかり、とても後悔しました。なぜあの時しっかりと話を聞かなかったんだろう。なぜちゃんと勉強しなかったんだろうと、そういう思いが芽生えこれからは気持ちを新たに、自分がウチナーンチュとしての誇りを大事にこれから生きていこうと思いました。

高校を卒業し、かねてから興味のあった調理師専門学校に進学し、授業の一つにボリビア料理がありました。そこで普段自分が何気なく食べている物にも意味と歴史があることを知りました。さらにはボリビアで育っていながら地元の料理のこと全然知らないことに気付きました。すごくはずかしったことをよく覚えて

います。しかし、そんな気持ちとは裏腹に自分のルーツでもある沖縄の料理の事もほとんど知らないと感じ、どうにか知る方法はにかと、そこでウチナーンチュ子弟等留学制度を見つけました。憧れの沖縄への留学がある！沖縄へ行ける！しかも伝統芸能習得コースに琉球料理を学べるコースがある！まさに一石三鳥だと思い、思い切って応募しました。見事にウチナーンチュ子弟等留学生として受け入られ那覇市にある松本料理学院で勉強することになりました。

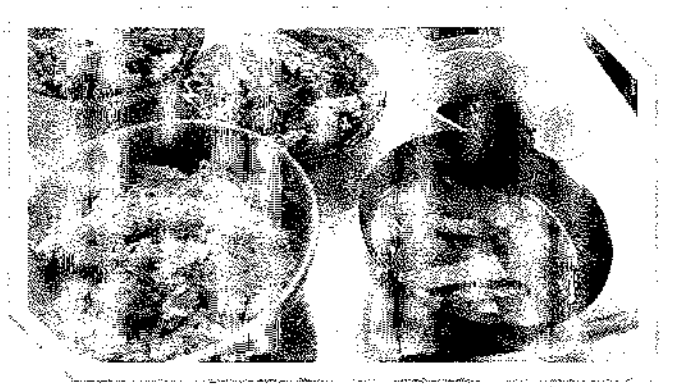
さて、前振りがかなり長くなりました。ここからはこの一年間の留学について話そうと思います。

初めての沖縄はイメージとは真逆でした。憧れの青い海、赤瓦の屋根、白いサンゴの道などはどこにもなく、周りは近代的なビルばかりでした。沖縄がこんなにも都会だとは思ってもみませんでした。そんな戸惑いもありつつ僕の沖縄での生活が始まりました。

僕が通うことになった松本料理学院では琉球料理をメインに、家庭料理科、洋菓子、おもてなし科の授業も受けることになりました。

琉球料理科

琉球料理の授業では院長の松本嘉代子先生の下、勉強が始まりました。先生の授業は日々学ぶことが多く、どんな質問をしても一つ一つ丁寧に答えてくれました。ボリビアでの琉球料理といえばゴーヤーチャンプルー、そばなどですが授業を受けるにあったってたくさんの料理があることに驚きました。例えばラッキョウチャンプルー、ふーちばージューシー、いなむどぅちなど他にも色々あります。そのほかにも昔宮廷でもてなされていた宮廷料理、庶民の人たちが作っていたうちなー料理なども習うことができました。研修期間で一番の行事は 12 月にありました。それは毎年行っ

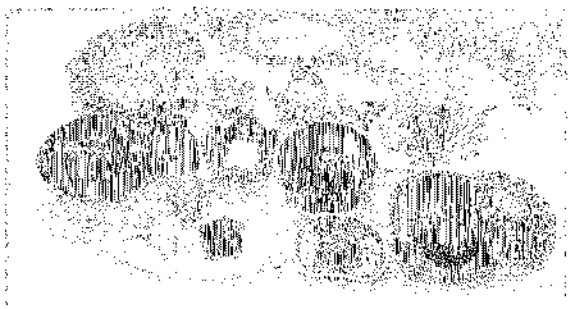


琉球料理の定番のジューシー、ゴーヤーチャンプルー、

ている 3 つの講習会です。一つは琉球新報社主催のお正月に作る琉球料理です。このイベントのために前もって撮影会をやりました。その他にも前日に試食作り、材料の切込み、当日は朝から試食の箱詰めをしたりなど大変でしたが毎年やっていると聞き、感心しました。そしていざ講習会が始まると目の前には約 600 人の観客がいました。びっくりしました。たくさんの観客が来るとは聞いていましたが、予想を超えていました。僕の役目は観客のみなさんに試食を配ることと、何かあった時のためにスタンバイする事でした。その場にいるだけでとても緊張しました。そして講習会は無事終わりました。しかしその二日後にはもう一つの講習会が待っていたのであまり安心できませんでした。なぜなら次の講習会では先生の助手の一人が来れないということで僕が第二の助手を務めることになりました。それを聞いたときびっくりして本気で断ろうかと思いましたが自分の中で覚悟を決め、いざ講習会に臨みました。

この講習会は沖縄タイムス社主催でお正月に作る和食をテーマとした講習会です。前日不安であまり眠れずそのまま会場に行き、講習会が始まっても緊張が収まらず、内心「どうか無事に終わりますように。何も起きませんように」と何度も思いながら作業をしていました。講習中は少しバタバタしましたが何とか無事終えることができました。終わった瞬間肩の力が一気に抜け、ほっとしたのを覚えています。

講習会で作った料理。右から琉球新報主催の琉球料理のお正月料理、左は沖縄タイムス主催の和食のお正月料理



最後の講習会では期間が少し空いたのに加え助手の方も二人いたので気持ちに余裕ができスムーズに進みました。

僕はこの 3 つの講習会を通してとても成長できたと思います。前日の試食作り、材料の切り込み、当日は朝早くから箱詰めなど大変でした、前の日の夜は心配でなかなか眠れなかったです。でも松本先生をはじめ、先生の助手の儀間さんと名嘉さんに助言をもらっていなければ講習会でうまくいかなかったと思います。先生方には本当に感謝しています。

この一年間琉球料理を学び先生が大切にしていきたいといわれていた行事料理などもいくつか教わりました。ハマウリ、シーミー、旧盆、お正月料理など。旧盆の重箱料理の具や並べ方、数など学びちゃんとした決まりがあることを初めて知りました。ボリビアでも旧盆は行われますが、このような決まりがあることを知っている人はあまりいません。帰国したらこの教えを生かしていきたいと思いました。

僕は松本先生の下で勉強できて本当に運が良かったと思います。先生は琉球料理を残したいと強く思っていて僕も琉球料理があまり普及されていないボリビアで作り、将来的にはボリビアのウチナーンチュ達に興味を持ってもらい琉球料理の大切さを受け継いでいければいいと思います。そのためにこれからも頑張っていこうと思います。

家庭料理科

琉球料理とは別に家庭料理の授業を受けました。がなは理恵子先生の下で様々な国の家庭料理を学びました。授業は週 3 回で各授業違う生徒さんなので毎回沢山の人と触れ合うことができました。20 代の女性たちから 70 代の男性まで幅広い年齢の方と授業を受けました。自分は少し人見知りの部分があるので最初のほうはあまり話などできませんでしたが少しづつ慣れていき今では皆と仲良くなれたと思います。生徒の皆さんはそれぞれ個性があり、毎回新しい発見を見つけることができました。

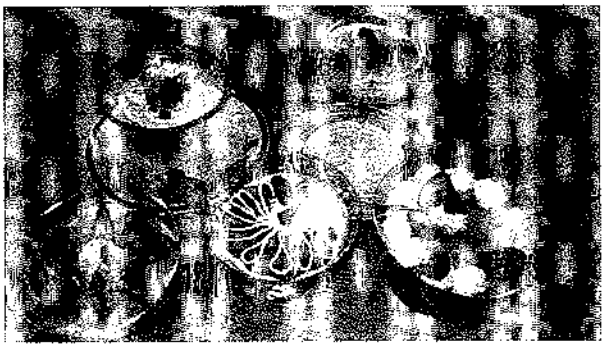
家庭科の授業は上にも書いてある通り、様々な国の料理を家庭で簡単にできるようにアレンジされたメニューを作るということです。先生のデモストレーションの後にそれぞれのグループに分かれ、料理を作りにかかるんですがそのたびに「せんせ～、これはどうやるんですか～？」とクラスに響き渡る声は今でも忘れられません。いつもクラスを和ませてくれました。

家庭料理の授業とは別にがなは先生は沖縄電力で IH の料理体験の講師をやっており、その授業の助手をやることになりました。最初は先生に言われるがままに前日準備をし、当日沖縄電力に行き、ことの大きさに気付き、一気に緊張が走りました。そのまま体験教室が始まりました。初の助手はとっても緊張しました。IH を扱うこと自体初めてで時代の進歩を感じました。IH は火を使わないので揚げ物をしても全然火事の心配もなく調理できます。それから那覇、浦添、うるま、名護とこの箇所を回り体験教室のお手伝いをしました。回を重ねるごとに IH の教室が楽しくなりました。IH という時代の進歩を感じ、また先生の助手を務めることで多くの事を学びました。誰かの助手をするということはめったにない機会なのでとてもいい経験になりました。先生に迷惑をかけなかったことを祈っています。

先生と事務局の金城さんにはいつも助けられていました。色々な相談に乗ってもらったり、的確なアドバイスをいただいたりしました。僕の何気ない質問に対しても僕が求めてる以上の答えが帰ってきていつも助かりました。一年間本当にありがとうございました。

洋菓子

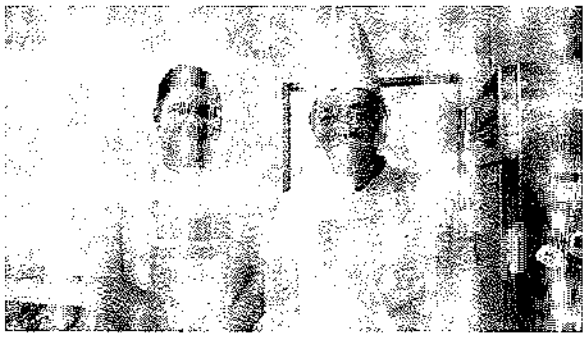
月に一度、ケーキの店「Duo」のオーナーシェフ、與那覇政義先生が洋菓子の授業を教えてくださいました。一緒に授業を受ける皆さんは松本料理学院に何年も通っているベテランの方々でした。フランス菓子からアメリカ菓子などを習うことができました。最初のほうは全然慣れていなくて生地の混ぜ方などもうまくいかなかったです。それでも先生は手取り足取り教えてくださいまし



た。先生の教え方はとても分かりやすく回を重ねるごとにうまくできるようになり先生から「うまくなったね。」と言われとても嬉しかったです。

授業ではババロア、エンゼルフードケーキ、デビルスフードケーキ、アップルパイ、レモンパイなどを作りました。その中で一番印象に残っている授業は「カルデナルシュニッテン」というお菓子を習った授業です。このお菓子は先生のお店で実際に売られているメニューでとてもおいしいお菓子です。そのお菓子を習うことができとてもラッキーでした。作り方は難しいですが帰国して作りたいメニューの一つになりました。

洋菓子の授業で一番心に残った言葉があります。それは、最後の授業の日に言われた言葉です。その日は最後の授業だったので、いつも以上に気合を入れて授業を受けました。授業が終わり、先生と記念撮影した後に言われた言葉がとても印象に残っています。それは「料理の世界でもそうだけど、お菓子の世界では進むにつれ必ず大きな壁にぶつかる。その時は何をやってもうまくいかない。でもその壁を乗り越えると必ず成功するよ。君ならその壁を乗り越えると思うよ。」という言葉を頂きました。自分にはもったいない言葉に思いましたが嬉しさのほうが勝り、これからもこの言葉を胸に頑張っていこうと思いました。



與那覇先生一年間ありがとうございました。これからも一生懸命頑張ります。

<u>ポリビア料理教室</u>

2 月 10 日に僕はポリビア料理教室を行いました。一月にいきなり「二月にポリビア料理の料理教室やってほしいんだけど～」と、我那覇先生に言われたときはびっくりしました。それから授業をすると決意し、一か月後の料理教室のために

早速メニュー作りを始めました。悩みに悩みぬいた末、四品を作ることにしました。それでもやはりぶつけ本番でやるのは不安だったので、一日学院を借りて試食会をすることになりました。買い出しに行き、作ったメニューで試食作りをしました。そのあとに我那覇先生といろいろ話しながらメニューの改善を重ね、本番を迎えました。思っていたより生徒さんがいてびっくりしました。普段は一緒に授業を受ける人たちの前に立ち、授業をするのはとても緊張しました。

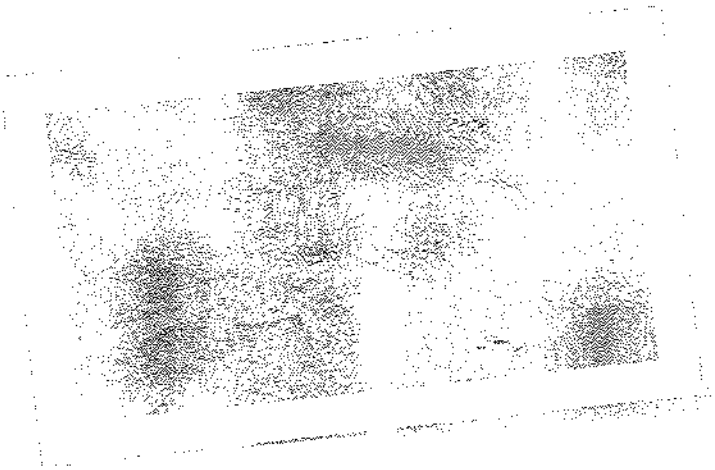
授業が始まり、僕はとにかく何事もなく終わってほしいという思いでいっぱいでした。初めての料理教室は、なんだか不思議な感じでした。質問とかされても、多分しっかりと答えれたと思いますし、料理の味付けなどもうまくいったと思います。ボリビア人の味付けは、やはり日本人よりも濃いので少し、皆さんには食べにくかったかなと思いましたが、やはりボリビアでの味付けを教えないといけないと思ったので、本場の味付けにしました。無事デモストレーションを終え、ちょっとした撮影会もやり、生徒さんも試食づくりに取り掛かるとやっと一息つき、落ち着きを取り戻すことができました。そのあとは、生徒さんとお話ししたりして授業が終わり、みなさんが帰る際に「ありがとうございました。お疲れ様でした。」と言われたことが、本当にうれしかったです。

僕はボリビア料理教室をやってよかったと思います。言われたときは全然自信がなく、正直断ろうとも思いました。でも実際にやってみて、生徒さんたちが真剣に僕の話を聞いているのをみて、なんだかいい気分になりました。こんな僕の授業のために時間を作り、来てくれている人たちがいることのありがたみにも気づいた日になりました。ほかにも、授業を受ける側ではなくする側に回ったことで、より多くの経験を積むことができました。

人々との出会い～憧れの沖縄を感じて

僕はこの一年間でたくさんの人々に出会いました。調理学院の生徒さん、WYUA「若者ウチナーンチュ連合会」のメンバーや財団の皆さんなど多くの人に出会い、一人ひとりからいろんなことを学びました。特に前田大樹さんには一番お世話になりました。前田さんには海や赤瓦の屋根の家、石畳道などを見に連れて行って

もらいました。渡嘉敷島で見た海は今まで見た海の中で一番綺麗でした。この海こそが僕が今まで見たかったものなんだなと思いました。



WYUAのメンバーには盛大に歓迎会を開いてくれたり、自分たちの行事にも招待してくれたりといつも僕らに良くしてくれました。メンバーはそれぞれ沖縄の未来について語り、それを行動に移していることがとてもすごいなぁと思いました。僕の沖縄への思いよりはるかに強いので、僕はまだまだだなと思い、これからも沖縄/オキナワのために色々頑張りたいと思いました。

また、中学時代にお世話になった派遣教師の先生方とも再会することができました。比嘉先生、名嘉先生、松尾先生と再会し、皆さん元気そうでなんだか安心しました。数年ぶりに会う先生方とは、色々な思い出話が弾みました。自分がヤンチャだった中学時代の話や、少年野球の南米大会でボリビア代表初のベスト4に進出した大会の話など、話し出したらキリがなく、いつも楽しかったです。また、当時あまり理解しようとしなかった、自分のルーツの話になったりして、今までちゃんと聞いてなかった事が申し訳なかったなと思いました。今はちゃんと自分の祖父母がどこの出身か分かりますし、実際にその場所に足を運び、自分のルーツを知りました。ちなみに僕の祖父母の出身は、母方の祖父は国頭村、母方の祖母は豊見城市、そして僕に沖縄の話をしてくれたひぃおばぁの出身は東村です。国頭村や東村に行ったときは、なんだかコロニアオキナワに帰ってきた気分でした。違いは山があるのとないのぐらいです。山の代わりに畑があるのが、コロニアオキナワです。僕は写真でしか祖父は知りません。でも、祖父がいてくれたおかげで今の僕がいるので、おじぃおばぁが生まれ育った地域に行かないといけないという使命みたいのを感じま

した。実際、おじいおばぁの生まれ育った場所に行ってみて、なんだか自分の足りないものが埋まった感じがします。なんとなくですが、祖父母たちがどんな生活をしていたかを想像してみました。戦時中は、この山奥に子供たちを守りながら逃げていたのかなぁと思いました。改めて祖父母を尊敬しました。

僕はこの一年間で出会った人々に、非常にお世話になりました。だから、僕が沖縄でもてなされたことをボリビアでお返しをしたいと思うので、ボリビアに来た際は僕でよければいろんなところを案内します。

将来のために僕にできること

僕は、この一年間留学していく中で、常に帰国後何ができるか考えていました。最初のほうは、新生活に慣れるので精いっぱいで、あまり考える余裕はありませんでしたが、時間がたつにつれ考え出すようになり、自分はこれから何をすればいいのか。自分には何ができるのかを考えれば考えるほど、夜も眠れなくなりました。

そんな中、琉球料理の授業を受ける中で、ある変化が起き始めました。それは、松本先生の想いを聞いた時です。先生は数年前まで引退を考えていたそうですが、次世代に琉球料理を受け継ぐ人が不足していると感じ、引退を辞めてまで後継者の育成に励み始めたそうです。その想いを聞いて、僕は考えました。僕の故郷のオキナワでは食文化が普及しているのか？エイサー、琉球舞踊などの芸能を受け継いでいる人は多くいますが、琉球料理という沖縄の大切な文化を受け継いでいる人は少ないです。そこで僕は帰国し、この一年で学んだことを作り、伝えることで、ボリビアのウチナーンチュに少しでも興味を持ってもらい、将来的にはたくさんの人に琉球料理の素晴らしさ、大切さに気付いてもらい、普及、継承につなげていきたいと思います。そして先生のように後輩たちに指導できる存在になる事。それが僕の夢、そして目標になりました。

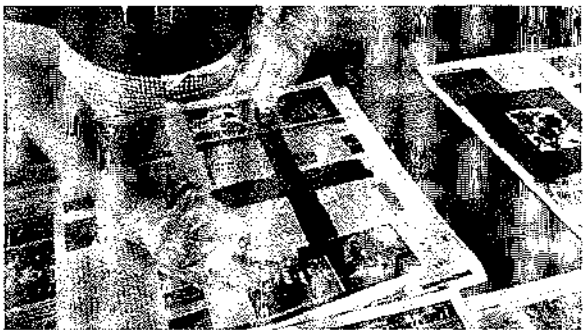
一年間本当にお世話になりました。いっぺーにふぇーでーびたん！！

沖縄での思い出

山中メガーン好美カリスタ（アメリカ）
沖縄県立芸術大学

４月７日沖縄に来ました。色々な人に会った。そして親戚といっしょにシーミーに行きました。シーミーは初めてしました。でもいい経験でした。そのあと WYUA たちといっしょに海に行ってパーティしました。みんなは県費留学生を温かく歓迎してくれました。

４月から６月まで紅型を習いました。私は紅型が本当にきれいと思います。だからわくわくしました。紅型はアメリカの染と違います。なので、１回の紅型タペストリーはあまりきれいじゃない。でも頑張りました。２回のタペストリーはもっときれいでした。そして少しずつ上手になりました。初めた時、先生の型紙とデザインを染めました。紅型の染が特別なテクニックとやり方があります。だから練習のために、先生の型紙とデザインを使いました。



染め方が上手に出来たあと、自分のデザインを作りました。コースターの型紙をいっぱい作りました。そして先生が４個選びました。その型紙は「しゃばり」しました。「しゃばり」は手書きからステンシルを作る過程です。

コースターの型紙が終わったあと、私はてんぷす那覇に入りました。あそこで働いた時、人にいっぱい会いました。沖縄の人はやさしいと思います。みんなは私に色々なことを手伝いました。だから私は本当に嬉しいです。てんぷす那覇で紅型をいっぱい勉強しました。そして英語だけ話す観光客を手伝いました。時々、お客さんがいっぱいありました。なので、私たちは本当に忙しかった。６月はとても楽しかったです。

7 月はちょと夏休みがありました。色々なところを見に行きました。でも、首里城に行きませんでした。平和通りとほかのアーケード街を探りました。そして、たくさん面白い人と話しました。休みが終わってから、日本語学校に行きました。芸大に行くために、日本語をたくさん勉強しました。本当に頑張りました。7 月 25 日は私の誕生日でした。オリオンビーチクリーニングに行きました。台風が来ましたから、みんな本当にビーチのために掃除しました。とても楽しかったです。

8 月は日本語を勉強しました、たくさん宿題がありました。 私の日本語は本当にレベルアップしました。県ぴ留学生といっしょに山原に行きました。私は間に合わなかった。でも山原でたくさん習いました。 山原クイナはとてもかわいいです！

9月に日本語学校が終わりました。そして、友愛キャンプに行きました。キャンプはすごい楽しかった。兵庫のみんなさんといっしょに首里城といろんなところに行った.そして、たくさんれきしを習いました。兵庫と沖縄はよくつながっていました。本当にいい経験でした。そのあとにまたオリオンビーチクリーニングに行きました。私はあまり飲

みませんけど、海が大好きだからオリオンビーチクリーニングはだいじと思います。みんなのためにビーチをそうじしたら、私はうれしいです。

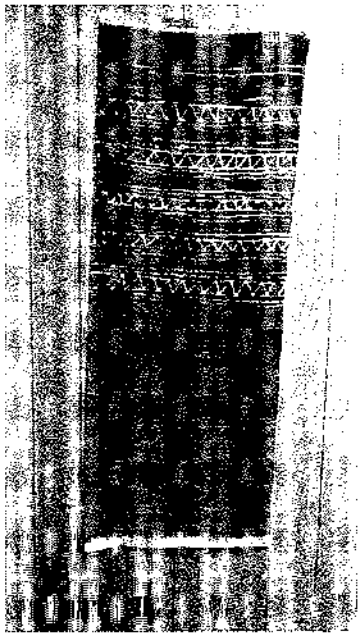
10 月から私は沖縄県立芸術大学に行きました。１年生といっしょに工芸 1 に入りました。

さいしょ私たちは漆をやりました。A5サイズのパネルをデサインしました。そして貝を切りました。貝はとても小さいなので漆は本当にむずかしいです。漆でパネルに貝を張ります。そしてパネルを漆に塗ります。一日とくべつなはこにパネルを置きます。乾いたら、カッターで貝をあぶり出します。また塗ります。漆は少しずつ形作るので、とても時間がかかります。私は漆にあまり興味ありませんでした。でも、漆はとても面白いと思います。

漆の終った後、陶芸をしました。学生たちはいっしょに陶磁を作りました。足で混ぜて、陶磁を色々な形に作りました。 私はばけものみたいな皿を作りました。 みなさんはいっぱい面白い形を作りました。作り終わったら、私たちは陶芸をぜんぶ焼き窯に入れました。大きな火を作りました。そしてみんなの陶芸をやきました。陶芸をやき終わったら、私たちはマシュマロといもをやきました。とても楽しかった。

次の授業は染でした。アメリカで色々な染めものを習いました、でも筒描染は初めて。力と我慢は必要です。一番目はせんだけのデザインをしました。簡単なデザインは問題ないと思いました。でも私はぜんぜん間違いました。チップを準備する時、私は小さい方がいいと思いました。でも、のりはぜんぜん出さなかった。

洗ったあと私はぎざぎざのせんが好きでした。アフリカのワックスプリントと似てる。そして二番目はアフリカらしいデザインになりました。アフリカでワックスプリントの不備は問題ないです。不備はみんなとくいになります。私の好きなワックスプリントは、明るい色とジオメトリック形だから、二番目はこの感じになりました。



１月４日学校に帰りました。工芸１の最後の授業は織物でした。織物は初めてではありませんけれど、最初から間違いはどんどん積もりました。1 回綜は間違いました。そしてもう 1 回間違いました。2 回直したあと、織りきを準備しました。織り時は糸をいっぱい直しました。そのあとから織り方は大丈夫でした。私は織方が好きですから、早く終わりました。準備の方はむずかしい。そして私はいつも間違います。

２８日で工芸１は終わりました。ですから、２月に日本語とスクリーン印刷授業まだありました。

日本語の試験はむずかしい。でも４月から私の日本語はたしかによくなりました。１年間の間で日本語をいっぱい勉強しました。そしてもう少し上手になりました。たぶん試験よく出来たかもしれない。スクリーン印刷はアメリカでいっぱいやりました。けれど生地だけ印刷しました。授業で紙と T-シャツを印刷しました。紙は生地と似てる。だからあまり問題はありません。ですから、T-シャツの方はちょっと違います。難しくない。でも本当に気を付けてする方です。

授業が終わったら、すぐ友愛キャンプに行きました。今度のキャンプは兵庫県でありました。なので飛行しました。冬に行きました。そして兵庫県はとても寒いでした。温度は沖縄より寒かったけれど、沖縄の方はたぶんもっと寒く感じることがあったと思います。兵庫県あまり風がありません。そして沖縄の風はいつも強いので、沖縄の方が寒いと思

いました。友愛キャンプは４日で短いと思いました。朝から深夜まで兵庫のみなさんと話しました。そしてみんなが本当に仲良くなりました。

翌週県費留学生は横浜に行きました。雨がいっぱい降りました。なので私たちあまり旅行しませんでした。でも横浜は楽しかったです。中華街に行きました。そして美味しい食べ物いっぱい食べました。その間にレストランの人と面会しました。色々な移民のことを聞きました。そして中華街の移民歴史をたくさん習いました。又ブラジルの留学生と話しました。移民のことをよく考えました。

２月の終わりから私はもうすぐアメリカに帰ります。けれど、この経験は絶対に忘れません。１年の間は私はたくさん、たくさん習いました。そして友達と仲良くなりました。本当にすばらしい１年でした。

平成27年度 ウチナーンチュ子弟等留学生修了報告書

沖縄県

<受託者>

公益財団法人　沖縄県国際交流・人材育成財団